

Title	スペインにおける伝統的社会的変容と人の移動： カタルーニャの交易ネットワークとキューバへの移住
Sub Title	Catalonian migration to Cuba and the commercial network during the first half of the Nineteenth century
Author	八嶋, 由香利(Yashima, Yukari)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.4 (2007. 3) ,p.65(443)- 104(482)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070300-0065">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070300-0065</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# スペインにおける伝統的社会的変容と人の移動

——カタルーニヤの交易ネットワークとキューバへの移住——

八嶋 由香利

一 はじめに

バルセローナ市街を一望する丘陵地帯に、建築家アントニ・ガウディの設計したグエイ（グエル）公園<sup>(1)</sup>が広がっている。この一帯は彼のパトロンであったアウゼビ・グエイ Eusebi Güell がサルバドル・サマー Salvador Sana から買い取った土地である。このグエイ家もサマー家もインディアノス (indianos) とよばれるアメリカから帰国した移民の有力家系で、彼らの資産の基本的部分は遠くキューバの地において形成された。カタルーニヤとキューバという数千キロを離れた二つの地域は、双方の人の流れによって結びつけられ、その相互作用は各々の社会の進展に影響を及ぼし続けた。一九世紀のスペイン史と同じく、カタルーニヤ史もまたキューバとの

関係を抜きにして理解することはできない。

スペインはコロンブスの新大陸発見以来、五百年間アメリカとの交流の歴史をもつが、従来の研究は商業史や交易史が中心で、金・銀などの貴金属や商品といった「モノ・カネの移動」への関心は高かったが、「ヒトの移動」に対する関心はそれほどではなかった<sup>(2)</sup>。人が対象となる場合でも、黄金世紀（一六世紀—一七世紀前半）の著名なコンキスタドル（征服者）や船乗り、聖職者などに関する伝記的なものが多く、国境を越えて出て行った無名の人びとについて顧みられることはほとんどなかった。しかしフランコ後の民主化で地域史研究が盛り上がり、さらに一九九二年の「アメリカ発見五百周年」といった一連の記念行事に触発され、こうした状況にも変化が生じてきた。特に移住の歴史を「国民史」の視点か

らではなく、各地域で発掘された史料をてがかりに、地域社会との関連から読み解いていこうという動きが進んでいる。<sup>3)</sup>しかし、黄金世紀や一八八〇年代以降の「大量移民の時代」の移住に関する研究が先行し、この二つの時代に挟まれた時期、つまりアンシャン・レジームの崩壊から近代社会成立への移行期における移住については、まだ不明な部分が多く残されている。

そこで本稿は「大量移民の時代」の直前、具体的には一八世紀末から一九世紀前半にかけてカタルーニャでブームとなったキューバへの移住を取り上げ、ハプスブルクやブルボンの独占貿易の時代とも、また一九世紀末からの大量移住とも異なる「過渡期の移住」における固有の性格を明らかにしようとするものである。この「過渡期」とはアンシャン・レジームの崩壊から近代産業社会への移行期であり、スペインにとってはナポレオン軍の侵入、独立戦争、カルリスタ戦争<sup>4)</sup>そして海外植民地の独立とまさに政治的混乱と危機の連続する時代であった。この困難な時代を何とか生き抜こうと、人びとはわずかに残された植民地の一つキューバを目指して大西洋を渡った。こうして生まれた人の流れは、それぞれの地域社会を結びつけ、その歩みにもさまざまな影響を及ぼすこ

とになる。最近の研究では、移住を促す諸要因の分析や移住先社会への同化、統合といった問題だけでなく、数年から数十年にわたる滞在を経て、再び故郷に戻ってきた人びとも関心が向けられている。<sup>5)</sup>本稿でも、カタルーニャに戻ってきた移民が、地域の経済や文化にどのような影響を与えたのかを考えてみたい。なぜなら、一九世紀の工業発展でカタルーニャはスペインにおける近代化の先頭に立つことになるのだが、この過程で帰国移民の果たした役割は、おそらくスペインのどの地域よりも大きかったと考えられるからである。さらに社会の近代化は移住のあり方そのものをどう変えていったのだろうか。本稿は以上の問題関心に応えるための枠組みを提示する試論であり、最近の研究成果を踏まえつつ、まず「過渡期の移住」の基本的動向とその特徴を明らかにし、さらにカタルーニャ・キューバ間の人の移動とカタルーニャの社会変容との相関関係について考察を加えたい。

## 二 地中海から大西洋へ

### (一) インディアス進出の遅れ

イサベル女王以来、スペイン王室はアメリカへの渡航に厳しい制限を課したが、一六世紀に少なくとも二五万

人、一七世紀前半に二〇万人がスペインからアメリカに渡った<sup>(6)</sup>。その後一七世紀後半から一八世紀にかけて渡航者数はかなり落ち込むが、一九世紀後半になると蒸気船が登場し、一八八〇年から一九三〇年までの「大量移民の時代」には三五〇万人以上のスペイン人が大西洋を横断する。しかし、スペインのように地域差の大きい国では、移住動向についてもかなりの違いが見られるので、まずカタルーニヤからいつごろ、どのくらいの人がアメリカに渡って行ったかを見る必要がある。

米国人研究者ポイド・ボウマンによると、一六世には渡航者数の八、九割を南部や南西部（アンダルシア、エストレマドゥーラ、カステイリヤなど）の旧カステイリヤ王国出身者が占め、地中海側にあるアラゴン連合王国（アラゴン、カタルーニヤ、バレンシア、バレアレス諸島）からは一％にも達しなかった<sup>(7)</sup>。一七世紀になると多少変化が生じ、バスクやカンタブリア、ガリシアなど北部地域からの移住者が伸びてくるが、アラゴン連合王国の比重は二％とほとんど取るに足りない<sup>(8)</sup>。カタルーニヤからの渡航者数の比重が高まるのは一八世紀後半を待たなければならぬ。この時期になると、南・南西部の出身者は全体の四割以下に下がり、旧アラゴン連合王

国からもアメリカへの渡航が増え、バスクやガリシアと並び九％近くにまで上昇する<sup>(9)</sup>。

カタルーニヤ人のアメリカ渡航が一八世紀になってようやく増加し始めたことは、ジュゼップ・M・バルナダスの研究によっても裏付けられる。それによると一四九三年―一八三〇年までに彼の確認したカタルーニヤ人渡航者（三、四六一人）の中で、初期（アメリカ発見―一六〇〇年）に渡航した者は全体のわずか三％で、一七世紀と合わせても、ハプスブルクの時代に渡航した人は全体の二割にすぎない。一方、全体の六一％が一八世紀に、そして一六％が一九世紀の最初の三〇年間に渡航しており、ブルボンの時代になってからカタルーニヤ人の渡航が増えたことを確認できる<sup>(10)</sup>。彼らの職業を見ると、最も多いのが聖職者と役人・兵士で、全体の九割を占めている<sup>(11)</sup>。メキシコのバハ・カリフォルニアやベネズエラでの植民・布教における彼らの役割は大きかったし、カタルーニヤ人兵士はキューバ島の防衛にも参加した。しかし、一八世紀後半になると、今度は海運業者や船乗りといった商業関係者の渡航が増えてくる。彼らの六〇％が一八世紀に、二二％が一九世紀最初の三〇年間に渡航しており、逆に一五―一六世紀という早い時期に渡った商人は

わずか九%である。<sup>(12)</sup>

以上をまとめると、ハプスブルクの時代、カタルーニヤからの渡航は非常に少なく、渡航者も聖職者や役人・兵士など王室関係者によって占められていたが、ブルボンの時代になると商人や海運業者を中心にアメリカへの渡航が増大していったと言える。

アメリカ進出がカステイリヤやバスクなど他の地域より遅れた原因について、カタルーニヤでは、それがカステイリヤによる植民事業の独占によるもので、その結果カタルーニヤがインディアス交易から「不当に排除されてきた」とみなす傾向がある。この説は一九世紀にカタルーニヤでロマン主義や民族主義が高まる中で強調され、二〇世紀に入ってからこの地域の歴史研究に影響を与え続けている。<sup>(13)</sup> こうした主張に対しては、まず国王の遺言書や勅令といった法令の文面とその遵守状況との間には乖離があったこと、また進出の遅れにはカタルーニヤ内部の要因(①カタルーニヤが中世後期以来の危機から脱しきれておらず、アメリカ進出のための経済力を欠いていた②人びとの関心が地中海世界のイスラム教徒との覇権争いにまだ向いていた③危険を伴う未知数のアメリカに自国の船を出すことをためらったなど)<sup>(14)</sup>も影

響していたことを指摘し、前述の主張が「排除の神話」にすぎないと反論する研究者も多い。<sup>(15)</sup>

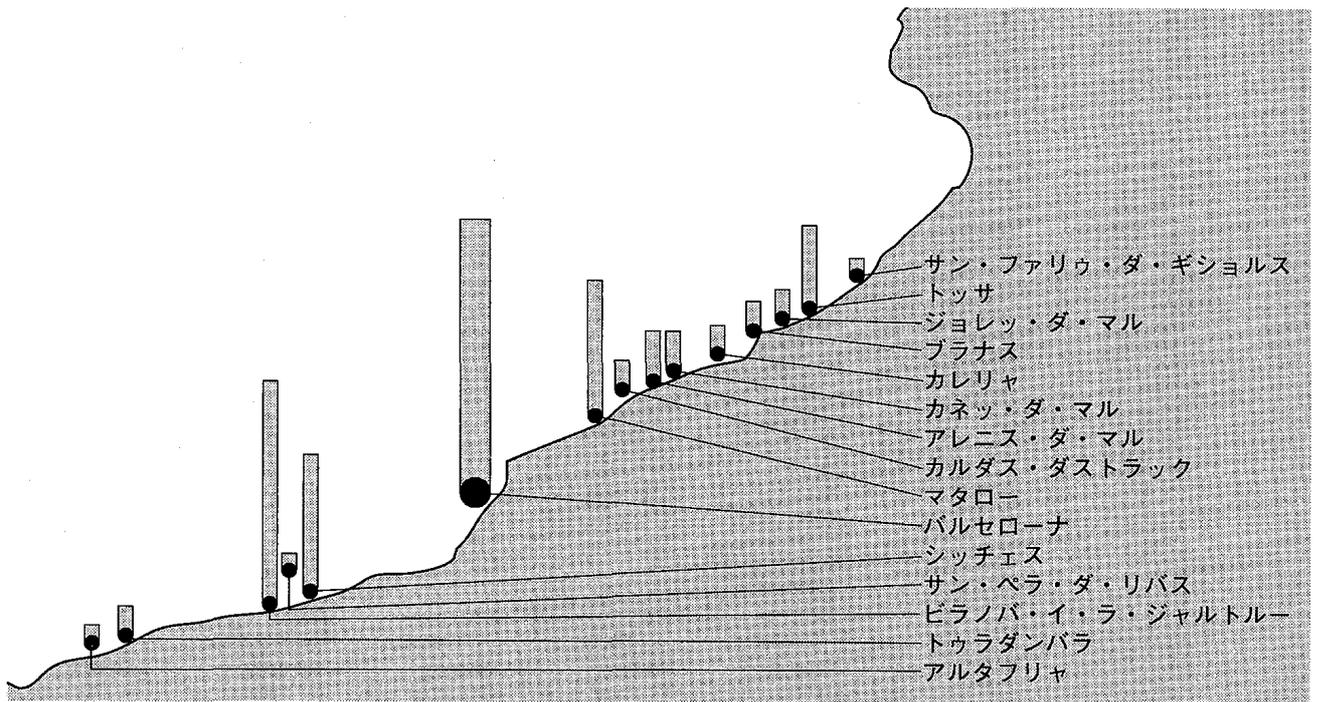
## (二) インディアス進出を促した要因

図表(一)は一七七八年から一八二〇年にかけて、アメリカに移住したカタルーニヤ商人(一、二六三人)<sup>(16)</sup>の出身地を地図に示したものである。彼らがバルセローナやマトロー、シツチェス、ピラノバ・イ・ラ・ジャルトルーといった地中海沿岸の出身であることが分かる。バルセローナを除くと、いずれも人口数千程度と比較的小さな港町であるが、バルセローナより南のシツチェスやピラノバは後背地に有数のワイン産地をかかえ、ワインやブランデーの輸出が盛んであった。またバルセローナ以北ではムンセニイ山地から切り出される木材で帆船の建造が伝統的に行なわれてきた。

では、一八世紀になってこれらの地域からアメリカへの移住を促した要因は何だったのだろうか。これについて以下の三点を指摘しておこう。

### ① 人口増加と沿岸部への人口移動

カタルーニヤは一五世紀に内乱と経済危機によって疲弊し、一四世紀後半に四〇万人あった人口は一〇〇年後



註：移住者を6人以上出した市町村のみ記載

出典：Raimón Soler, *Emigrar per negociar*, p.47 (J. M. Delgado Ribas, "La emigración española a América Latina durante La época del comercio libre (1765-1820)"の数值から作成。

図表 (1) アメリカに移住したカタルーニャ商人の出身地 (1778-1820)

に二二万人にまで減少した。一六世紀に入ると徐々に回復に向かったが、一四世紀の水準に戻るのは一八世紀になってからである。しかし、その後は順調に伸び、一七一八年—一八七七年の七〇年間に人口を倍増させた。特にカタルーニャ内陸部から沿岸部に人が移動した結果、沿岸六六市町村では、人口が九万人から二七万人へと三倍に膨れ上がり、全人口における比重を二二%から三〇%へと拡大する<sup>(17)</sup>。この時代になると、イスラム教徒の海賊襲来も減ったため、小高い集落に居住していた人々は浜辺に下りて、次々と新しい集落を形成していった<sup>(18)</sup>。

## ② 沿岸交易の活発化

カタルーニャの沿岸部では山が海までせまり、平野が少ないため、昔から人びとは陸上より海上交通に依存して暮らしてきた<sup>(19)</sup>。人口増大による食料需要の伸び、農産物価格の上昇、商品作物の生産などで沿岸交易は活況を呈する。船員の数も増加し、一七七九年にはカタルーニャ全体でおよそ一万八千人の船員が登録されていた<sup>(20)</sup>。バルセローナやアレニス・ダ・マルには船員養成学校が開設

され、遠くバスクやガリシア、さらには米、仏、伊などからも学びに来た。<sup>(21)</sup>アレニス・ダ・マルの学校では一七七九年から一八〇九年の三一年間に一、〇七七名が実技試験を合格し海に出ていった。<sup>(22)</sup>

人口増加と活発な交易活動に支えられ、航路は少しずつ西に伸び、やがてジブラルタル海峡を越えていく。リスボンやガリシアなどイベリア半島北西部の諸港、さらにはロンドン、アントワープ、ブレーメンなど北西ヨーロッパの港にまで達し、そこでカタルーニャ産ワイン、ブランドー、乾燥果実などの農産品が塩漬けタラ（バカラオ）や小麦、肉などと交換された。このようにカタルーニャは伝統的な地中海交易を発展させ、それをヨーロッパ北方にまで拡充していったのである。

### ③ インディアス交易の自由化

最後に、カタルーニャの交易活動を外から刺激した要因として、スペイン王室の政策を上げることができる。

すでにフェルナンド六世の時代、バルセローナの有力商人を中心に特権貿易会社<sup>(23)</sup>が設立されていたが、やはりカタルーニャ人のアメリカ進出を決定づけたのは、カルロス三世による交易自由化 (Comercio Libre) である。英軍によるハバナ占領<sup>(24)</sup>から二年後の一七六五年、王室はバ

ルセローナを含む半島北部や東部の主要港とカリブ海域の港（ハバナやサン・ファンなど）との間で直接交易を許可し、その後アメリカ行きの手続をカデイスではなく、各地方港で済ますことができるようになった。<sup>(25)</sup>一七七八年には「スペインとインディアス自由交易令」が交付され、さらに広い地域がこの自由交易圏に組み込まれる。商人は期限内であるなら植民地にとどまって店舗を開設できたし、一七九〇年にはカデイスの通商院も廃止され、フロータス船団による独占貿易の時代はこうして終わりを告げた。

以上、人口増加と沿岸部への人口移動、沿岸交易の活発化によってカタルーニャは商業ネットワークをヨーロッパにまで拡大し、そして「交易自由化」によりインディアスへの門戸が開放されたことで、そのネットワークは一気に大西洋を越えて広がったのである。

### (三) 一八世紀型商業移住の特徴

では、交易自由化時代の移住にはどのような特徴があったのだろうか。第一に、移住者の多くが若い独身男性であったという点である。彼らは「カルガドレス *car-gadores*」、「エンコメンデロス *encomenderos*」あるいは

は「上乗り人 *sobrecargos*」とよばれ、船荷と一緒に海を渡っていった。商人として渡るには、スペイン国籍とキリスト教の洗礼証明書、十八才以上であり、両親の承諾書や結婚証明書、ある一定額以上の商品の通関証明書などを提出しなければならなかった。<sup>(26)</sup> さらに、アメリカですでに商売をしている親戚などを頼って行く場合は乗船客 (*pasajeros*) として乗り込んだ。「読み書き」を終えたばかりの一二、一三歳の少年の渡航も決して珍しくはなく、奴隷商サルバドル・サマーは一四歳で家を出たし、後に銀行家として名をはせるビダル・クアドラス兄弟の兄は一七歳、弟はわずか一二歳で大西洋を渡っている。長子限嗣相続が行なわれるカタルーニャでは財産のほとんどを長男が相続するため、次男や三男は軍や教会に入るなどして自活の道を探らねばならず、海外への移住もその選択肢の一つであった。

第二に移動の手段である。護送船団方式による大がかりな航海とインディアスにおける定期市（フェリア）での特権的商いとの違い、自由交易の時代には商機をつかむ情報収集力と行動の機敏さが要求される。七年戦争中、船団ではなく単独での航海が認められるようになる、カタルーニャからワインや綿製品を積んだ中・小型帆船

スペインにおける伝統的社会的変容と人の移動

が積極的に大西洋に乗り出した。バスクやガリシアとちがって木材に乏しいカタルーニャではもともと大型帆船の建造は難しかったのだが、出帆準備が短く、少ない船員数で迅速な航海が可能な中・小型帆船は、自由化時代の要請にむしろ適っていたと言えるだろう。ガレオン船は通常六千から九千キントル（二七六一四一ポンド）あったが、カタルーニャで建造されるものは一千キントル（四六ポンド）以下とはるかに小さかった。それでも大西洋航路へ適合する必要から、一八世紀を通して徐々に大型化が進み、一七七〇年代以降は三千キントル（一三三八ポンド）以上の船も建造されるようになる。建造された船の総トン数は年々増大し、ピーク時の一七八三―八六年には合計して一〇六、六〇〇キントルが建造され、一七五五―一七五五年を一〇〇とした水準の五倍以上に達した。<sup>(27)</sup>

第三に、カタルーニャでは「クメンダ *comenda*」、*「ソシエタス・マリス *societas maris*」*とった独特の資金調達方法が慣行として行なわれていた。これは法律が定める一定規模の資金を調達するために、多数の出資者から小口の資金を集める方式で、一回の事業（航海）が終了するとすぐに解散した。資金の乏しい者も参加が容易で、船大工や船主、船長などを中心とする血縁、地縁

七一（四四九）

的な人のネットワークを通して迅速な資金調達を可能にした。大規模資本の乏しいカタルーニャであり出されたこうした方式は、カデイスやマラガ、サンタンデルなどではほとんど見られなかったらしい。<sup>(28)</sup>

第四に、彼らの主な渡航先はプエルト・リコ、キューバなどのカリブ海諸島、あるいはティエラ・フィルメ（現在の中米）であった。図表（一）<sup>(29)</sup>であげた商人のうち、四三%がこの地域に集中している。サント・ドミンゴやハバナは軍事戦略上の拠点、また交易ルートの中継港であったが、熱帯の島でもあったので、気候的にヨーロッパ人の順化が難しかった。しかも大陸の副王領で鉱山開発が進むと、スペイン人入植者や特権的な大商人はそちらに引きつけられていった。しかし、「後発組」としてアメリカに進出し、農産品や雑貨類を主に取り扱い、小規模資本の家族経営で働くカタルーニャ商人たちにとって、植民地の中心より競合する相手の少ない周縁部の方が、自分たちの経済活動に好都合であったと考えられる。実際、植民地の富が集中するヌエバ・エスパニーヤやペルーに向うカタルーニャ人は少なく、ヌエバ・エスパニーヤでは世紀末（一七九〇—一九三年）になっても、旧アラゴン王国出身者は在住本国人一、四二一人のうち、

わずか一六名にすぎなかった。<sup>(30)</sup>

こうして大商人やフェリアを特徴とするハプスブルク時代の交易システムが瓦解する一方で、その間隙を縫うようにカタルーニャ商人はインディアスの「周縁部」に進出していった。七八年の「自由交易令」から対仏戦争が勃発する九三年までの十数年は、カタルーニャのアメリカ交易熱が最も高まった時期で、当時の手紙にも「アメリカとの交易はカタルーニャの海運業や農業、工業の景気熱をはかる温度計 (termómetro) のようなものである。人はみな景気の上げ潮に乗っかっているし、幸福に関する一つの法則がカタルーニャ中に広まった<sup>(31)</sup>」と書かれている。アメリカへの玄関口であるアンダルシアのカデイスには多くの外国商人が駐留していたが、カタルーニャ商人も一七四四年—一八一五年の間に一三八人が登録している。このうち登録者数が最も多いのが一七七〇—一八〇年代<sup>(32)</sup>で、交易自由化に続くこの熱狂期とほぼ重なるのである。カタルーニャの港町でも商人の登録が増え、シツチェスでは一七七二年の一九人から一五年後には九四人にまで増加した。<sup>(33)</sup>

ただ、アンシャン・レジーム期の移住は大量移民の時期と比べてその規模がかなり小さく、カタルーニャ全人

口に占める渡航者の割合もわずか〇・六一%にすぎなかったことを指摘しておきたい。<sup>(34)</sup>帆船の主目的は物を運ぶことであり、残されたスペースに積み込むことのできる人数には限りがあった。大量に人を運ぶことが可能になったのは、人を専門に運ぶ蒸気客船が登場してからである。

#### (四) 交易ネットワークと家族戦略

では、ミクロの視点から、個人とその集合体である家族の行動を通して、人を移住へと駆り立てる要因を探ってみよう。

渡航・移住は本人の個人的決断というより、彼を含む一大家族全体が社会・経済的地位の上昇を図るために編み出した「家族戦略」の一環であったと考えられる。例えば後に大富豪となったジュゼップ・シフレ・カザス Josep Xifré Casas の場合、一七九八年に母親が渡航手続きに同行し、息子の移住の動機について公証人に次のように語っている。「今回の旅は、神の恩寵により、われわれの一家にとって最も有用かつ利益となるでしょう」<sup>(35)</sup>。海運業者の家庭では、子供はまず見習いとして船に乗り込み、航海の経験を積みながら、水夫から航海士そして

船長へと一人前になっていく。商人の家庭でも、移住先の兄弟や親戚が経営する商店や事業所に見習いとして入り、商売の「いろは」を学びつつ、こつこつ働いて資金を貯めていくのである。このように個人の職業訓練は家族あるいは同族内で行なわれるが、それもまた一族のよい将来を展望してのことである。また、婚姻や遺産相続によって家産の散逸を防ぐことも重要で、婚姻はしばしば同族内で行なわれた。

では、実際に家族戦略と移住はどのようにリンクしながら展開されたのであろうか。その一例がある漁師の家に<sup>(36)</sup>見てみよう。カレリーヤという小さな港町の漁師ペラ・モレウは、一七六九年、息子ラモンをある農民の娘と結婚させた。おりしもアメリカ交易自由化の時代を迎え、息子は家業を棄て船員になる。当時、船乗りは一定の「労賃」ではなく、一回の航海から得られる収益に比例して報酬を分配される仕組みで、航海が失敗した時には損失も被るが、うまく行けば陸で働くより多くの収入を得ることができた。<sup>(37)</sup>また、商品を自分の荷 (paco<sup>(38)</sup>) として船内に持ち込み、渡航先で売りさばくことも可能であった。当時遠洋航海の船乗りは「一回目の航海の後に結婚し、二回目後に家を建てる」と言われ、ラ

モンもこうした経済的チャンスにひかれたのであろう。さらにその子フランシスコ（ペラの孫）は、航海学校を卒業して遠洋航路操舵士（Piloto de Altura）の資格を取り、船大工の娘と結婚する。おそらく義理の父の計らいで、その後ベルガンティーン船の船長として、ハバナやベラクルスなどとの間を行き来する。四代目のひ孫五人は、女三人のうち二人がそれぞれハバナとニューオリンズ在住の商人と結婚し、男二人は商人となった。その一人は父と同じく操舵士の資格を有していた。こうして大西洋をはさんで家族・親族のネットワークが張り巡らされていく。カタルーニャの商業進出と軌を一にしなから、農民や漁師の家系が世代を下るごとに、船乗りから遠洋航路のパイロット、さらに船長、そして商人へと社会的地位を段階的に上昇させていくのだ。

商人や船乗りが渡航先での長い滞在日数を過ごすのは同郷者の家であった。一七七〇―一八〇年代にかけてインディアスとの交易に従事した船長クリストフォル・ファレーとその船乗りたちが身を寄せた家々をたどると、まるでピラノバの町全体がキューバに引っ越してきたかのようであった。<sup>(39)</sup> こうして親族や同郷者の連鎖移住が続くことで、カタルーニャとキューバの特定地域や都市が移

住者のネットワークによって結ばれていくのである。

### 三 アメリカ交易の混乱と植民地の独立

カタルーニャのアメリカ交易は、一七九三年フランスとの戦争によって突然中断される。続く対英戦争、スペイン独立戦争と政治危機により、過熱気味だったアメリカ熱も急速に冷めていった。特に深刻な影響を及ぼしたのはイギリスとの戦争であった。強大な英海軍によるプエルト・リコやカナリア諸島への攻撃、海上封鎖、私掠船による拿捕、あるいはスペイン軍による突然の出航停止命令や海軍による商船（船員）の徴用、それを嫌った船乗りたちのアメリカ逃亡などでインディアス交易は混乱する。一八〇五年のトラファルガー沖の海戦では、徴用された商船も多数失われ、海運業は大きな打撃を受けた。一八〇四年、イギリスによる海上封鎖が再開されると、この年カタルーニャから出帆した船舶数（二〇隻）は前年度（一〇五隻）の五分の一以下にまで落ち込み、一八〇六―一八〇七年の二年間は合計しても一〇隻に達しなかった。<sup>(40)</sup>

交易途絶を懸念して、スペイン政府は一七九七年、植民地に中立国の商船の出入りを認めるといふ措置を発令

した。商人たちは地中海のバレアレス諸島に難を逃れ、敵国からの標的になりやすいスペイン船ではなく、中立国の船を雇い入れながらアメリカとの交易を継続しようとして努力する。しかし、中立国の商船の出入りは、「価格」と「見栄え」という点で外国製品に劣るカタルーニヤの商品をさらに窮地に追い込むことになる。この年の末、バルセローナ商業評議会 (Junta de Comercio) はアメリカとの交易について「新しい自由「競争」がカタルーニヤ全体にもたらす落胆と、間違いなくやってくる悲惨な結果」に触れ、「われわれの生業・幸福と両立させるために」中立国の船舶の出入りを差し止めるよう求め<sup>(41)</sup>ている。

帆船による交易はもともと冒険的・投機的性格が強いが、戦時にはさらに危険度が増大する。商船は護衛の戦艦も連れず、密かに航行しなければならず、海事保険の掛け金や借入金の子も跳ね上る。その一方で、成功した時の利益は平時を数倍上回ったので、危険を冒して航海し、破産に追い込まれる商人たちもいた。シフレー・カザスの父親ジュアン・バウティスタもその一人である。戦時中砂糖を積んだ持ち船を英軍艦によって撃沈され、しかもベネズエラへ向かった船は軍に徴用された。その

結果、ヨーロッパで高く売れるはずであったカカオの取引チャンス逃がして破産に追い込まれたのである。その負債は息子ジュゼップが返済せねばならなかった。<sup>(42)</sup>

戦争で影響を受けたカタルーニヤの港には輸出できないワインやブランデーが積上げられ、輸出品の製造所も閉じられ、「海はイギリス人が掌握し、そのため商売は陸にのがれ、人は貧しさに打ち震え、物乞いをする貧民は嫌悪感をもよおすばかり<sup>(43)</sup>」であった。カタルーニヤ総司令官ランカスター公の下に「慈善協議会」が設立され、失業対策として公共事業が、また職を失い路頭をさまよう人びとのために救済鍋 (olla publica) が供された。

一八〇八年に始まったナポレオン軍の侵入で、スペインはさらに混迷の度合いを深めていった。本国の植民地統治は麻痺状態に陥り、この危機に乗じてメキシコでは独立を求める戦いが開始され、やがてラテンアメリカ全土に拡大していった。フランス軍が撤退した数年後の一八一八年、本国政府は中立国の商船出入りに再び規制をかけようとしたが、すでにパラグアイ、メキシコ、アルゼンチン、グラン・コロンビアなど主な植民地は続々と独立を達成し、これらの地域には英米の商品が流れ込んでいた。スペイン船は独立した国々の港に寄港を許可さ

れず、一八二〇年代にスペインの対アメリカ交易は最低水準に落ち込む。二二年の秋、当時の駐西イギリス大使ア・コートは内務大臣カニングに「スペインの」繁栄と偉大さの源泉は衰え、そのいくつかは永遠に枯渇した。商業は破綻し、農業は打ち棄てられ、植民地は失われ、人々は打ちひしがれ、活力は失われ、まさに崩壊そのものだ」と書き送っている。<sup>(45)</sup> 財政破綻の淵にあったスペインから資金は国外に流出し、三〇年代に入ってからも人びとは資金不足とデフレに悩まされた。スペインのアンシャン・レジームの危機は、その中で繁栄してきたカタルーニャ商業の危機でもあり、それゆえ「危機の中の危機」と呼ばれる。<sup>(46)</sup>

独立を達成した諸共和国とスペインが外交交渉に入るのは、フェルナンド七世の死と共に絶対主義が終わり、一八三四年の欽定憲法 (Estatuto Real) で立憲君主制が開始されてからのことである。植民地独立後の新しい国際秩序の中心は英米の二国であり、スペインは「大西洋システム」の周縁に押しやられ、インディアス交易の拠点として栄えたカディスは没落した。それでも戦乱が収まって大西洋が再び平穏になったとき、海運業者や商人たちはかつての繁栄の記憶をたよりに、一度絶たれたネ

ットワークを回復すべくまた海を渡り始める。目的地はスペインに残された数少ない植民地で、しかもこの時期にめざましい経済発展をとげつつあったキューバであった。

#### 四 植民地キューバへの移住

##### (一) 製糖産業の発展と人口構成

では、カタルーニャも含むスペインからの移住者を引きつけたキューバの諸要因をもっと具体的に見ていこう。第一に挙げなければならないのは、製糖産業の急速な拡大である。この時期、キューバは世界砂糖生産に占めるシェアを二二・一九% (一八一五—一九年)<sup>(47)</sup> から二三・三八% (一八三八—四二年) に伸ばしている。<sup>(47)</sup> このプランテーション生産を支えたのが奴隷労働力であり、毎年多数のアフリカ人が島に連れて来られた。一八世紀末からアフリカ系黒人・混血の比率は白系人口を上回り、<sup>(48)</sup> 奴隷人口がピークを迎える一八四一年の調査では、総人口の五八%が黒人・混血住民で、白系住民 (四二%) を一六%も上回っている。一八五〇年ごろから再び白系人口の割合が増えていくものの、ハイチ革命の記憶、解放奴隷らによる反乱計画の発覚、<sup>(49)</sup> D・ターンブルなど奴隷廃

止論者のプロパガンダにより、スペイン人やクリオーリヨの「奴隷反乱」に対する不安は増大し、一八四三年の「エスカレラ（はしご）反乱計画」でのように、しばしばヒステリックな反応を引き起こした。<sup>(51)</sup> こうした社会状況の中、スペインからの移民は、人口構成における「アフリカ化」を抑制し、島の「スペイン化」を強化するのに不可欠な手段として考えられたのである。<sup>(52)</sup>

では、キューバにはどのくらいの移民が入ってきたのだろうか。例えば一八三六年、この島には八、〇六一人が移住者として入っている。その内、欧米諸国からの外国人が約二割で、残りがスペイン人である。中でもカナリア諸島出身者は二、六九〇人とスペイン人の四割を占めていた。<sup>(53)</sup> スペイン本土からの移住者は三、七六九人で、うち囚人が一、〇七八人、兵士が八六六人、自らの意思で移住した者一、八二五人である。兵士の中には徴兵期間終了後も島にとどまって暮らす者がいた。

次にスペイン人移住者を地域別に見てみよう。公式の渡航記録では、一九世紀最初の三五年間にキューバに移住した人（総数四、二四九人）の中で、カタルーニャ人が二、四七五人と最も多く、全体の五八・二％を占めている。<sup>(54)</sup> 次にアストゥーリアス（一四％）、バスク（九％）、

スペインにおける伝統的社会的変容と人の移動

ナバーラ（四％）、サンタンデル（四％）とスペイン沿岸域の出身者が続くが、この時期のカタルーニャ人の占める比重は群を抜いている。おそらく「危機」以前の移住を上回る規模であったと考えられる。これについて、キューバの歴史家モレノ・フラヒナルスも『製糖所』の中で、キューバ社会で最初に影響力をもった移民集団はカタルーニャ人で、彼らの移住ブームが一八二〇年代に始まり、その移住者数が三四年以降大幅に増大した、と述べている。<sup>(55)</sup> 彼はハバナで白系移民が多数住んでいた二つの比較的大きな教区を取り上げ、その埋葬記録（一八三六—一八四〇年）を調べ、埋葬されたスペイン人の中でカタルーニャ人の割合が五六・三三％と非常に高かったことを明らかにしている。<sup>(56)</sup> 世紀半ば以降には、移住者全体におけるカタルーニャ人の比重は下がっていくが、それでもガリシアやアストゥーリアス出身者と並び一九世紀キューバにおける主要な移民集団の一つであり続けた。<sup>(57)</sup>

しかし、カナリア諸島出身者は別にして、スペイン本土からの移住者は、奴隷の代替労働力とはならなかった。彼らの多くが農場ではなく商業分野で働くことを望んだからである。M・ストルクのようにカタルーニャ人を農

場で働かせることを試みる人もいたが、成果を上げることはできなかつた。<sup>(58)</sup> 亜熱帯性気候、厳しい長時間労働、奴隷と同じ粗末な食事などに対する不満から抗議が頻発したからで、結局コストに見合わないとして計画は頓挫してしまつた。日系労働者の代わりに注目されたのが、中国人やユカタン半島の先住民インディオたちであつた。

## (一) 植民地市場と本国商人

製糖業の発展と共に、本国商人の活動がスペイン政府によって保護されていくことが、多くの移住者を引きつけた第二の理由である。大陸植民地独立後、スペインの商業資本は残された植民地、特にキューバに集中していき<sup>(59)</sup>。移民としてキューバに渡り、その後カタルーニャ・ブルジョアジーを代表する人物にまでなつたジュアン・グエイ Joan Guell は「豊かなスペイン領キューバは我々の農産品、そしておそらく工業製品にとつても主要な海外市場である。それは我々の海上交易の中心で、ここを基地としてモンテビデオやブエノス・アイレス、ニューヨーク、メキシコへと展開していくのだ<sup>(60)</sup>」とその重要性を強調している。カタルーニャ商業は世紀末の危機で打撃をうけたが、それを克服する鍵となつたのはキ

ューバの存在であつた。カタルーニャのワインやブランデーは南米で「タサホ(干し肉)」とよばれる奴隷の食料にかわり、タサホはキューバで砂糖と交換され、最後にそれは合衆国南部で綿工業の原料である綿花と交換された。このようにキューバの製糖業を介してカタルーニャの農業と工業が有機的に連結されたことが、この地域でのいち早い工業化を可能にしたのである。<sup>(61)</sup>

政府は「差別関税 *derecho diferencial de bandera*」の導入によってキューバをめぐる本国商人の活動を保護した(一八二八年の関税法)。これは輸送手段がスペイン船か外国船か、また積荷がスペイン産か外国産かによつて異なつた関税率を課すものである。例えば、一バレルあたりのスペイン産小麦が、スペイン船で持ち込まれた場合の課税は三ド(一八三五年まで)だが、外国船だとさらに五・五レアル(一レアル $\parallel$ 四分の一ペセタ)を払わねばならなかつた。また外国産小麦を西船籍で輸入する場合は七ド、外国船だと九ドプラス四レアルとさらに高い税金が課せられた。<sup>(62)</sup> スペイン市場は砂糖やタバコなど植民地商品を吸収できるほど十分な購買力を持つていなかつたし(キューバ輸出総額の一割程度)、またキューバが必要とする食料、衣類、生活雑貨、機械・道具類

などを全て供給することも不可能であった。したがって、スペインのキューバ領有をより確実にするため、島との経済的絆を関税操作によって人為的に作り出す必要があったのである。スペインの関税政策によって最も不利益を被ったのは、キューバ産砂糖を大量に輸入している合衆国であった。<sup>(63)</sup>

植民地市場で本国商人が盛んに行なったのが「奴隷売買」である。一八一七年に西・英間の条約で禁止されたが、キューバでは砂糖生産の拡大と共に廃止どころか逆にその取引は増大していった。植民地行政の黙認の下、比較的少ない資本で手がけられ、成功した場合の報酬も大きかったため、奴隷商だけでなく手取り早く富を増やしたい船乗りや役人たちもこれに関与していた。例えば植民地行政の最高ポストであるキューバ総督M・タコン（後述）は有力奴隷商たちと親交があり、一度解放された奴隷を再び收容し、その後「見習い」という名目で新しい主人に貸し出し利益を得ていた。<sup>(64)</sup> また、ハバナ市内に噴水や道路を建設する際にも「シマロン」とよばれる逃亡奴隷の労働力を利用した。

後にカタルーニャでインディアノスとして名を馳せた者の中にも、キューバ時代に奴隷売買に携わって蓄財し

た者がかなりいる。例えば後に侯爵の位を授かったアントニオ・ロペス Antonio Lopez（後述）は、サンティアゴに運ばれた奴隷をハバナやマタンサス、シエンフエゴスなど製糖所のある町に運び、仕入れ値の数倍の高値で売りつけた。バルセローナで彼の銅像が建立された広場は「奴隷商広場」とも呼ばれた。ピラノバ出身の移民サルバドル・サマーも奴隷売買で財を成した一人である。<sup>(65)</sup> 彼はバスク出身の有力奴隷商スルエタ家とも姻戚関係にあった。

奴隷の運搬はイギリスの監視艇に見つからないよう密かに続けられたが、J・M・フラデラによると、一八四五年までにシエラ・レオーネの裁判所に告訴された二四三隻の奴隷船のうちおよそ四分の一にあたる五六隻がカタルーニャ船であった。<sup>(66)</sup> 摘発される危険が高まると、一人当たりの奴隷の値段も高騰していった。奴隷の所有は裕福なスペイン人家庭では一般化し、シフレー・カザスのハバナにおける代理人の手紙には、彼らに対するスペイン人の家父長的な立場がうかがえる。「これはデリケートな問題で、それゆえとても注意する必要があります。彼ら「シフレー・カザスが所有する奴隷たち」には何一つ不足していません。奴隷として彼らよりいい待遇を得

ているところは他にどこにもないでしょう。ですからこれ以上彼らに何ができるでしょう。さらにこの種の人間にとって、自由は幸福などではありません。むしろ経験から言って、「自由は」彼らを破滅させます。あなたのような主人をもつことこそ彼らの幸運なのです<sup>(67)</sup>。

### (三) 植民地行政と本国商人

最後に、植民地行政政府（総督府）と本国商人との関係についても触れておこう。植民地支配の維持という点で彼らは協力関係にあった。それまでキューバは、ヌエバ・エスパリーニャ副王領の管轄下に置かれ、行政もある程度地元の有力クリオーリョ層の「自治」にまかされていた。しかし、メキシコ独立で副王領が消滅すると、本国が直接統治に乗り出し、さらに国内で絶対主義復活を狙うカルリスタによる反乱が勃発すると、戦費調達のため植民地統治は一層重要視されるようになる<sup>(68)</sup>。さらに、本国の自由主義化が植民地に波及しないように監視も必要であった。総督には、スペインにおける自由主義化から植民地を切り離し、あくまで現状を維持するよう指示が出された<sup>(69)</sup>。

それまでの緩やかな植民地統治を一掃したのが、自由

主義政権下で初めて総督として派遣されたM・タコン（任期一八三四—一八三八年）であった。「もしビーベス（前任者の一人）のように暮らせば、長生きするぞ *si vives como Vives vivrás*」と現地で揶揄されたが、彼は前任者たちと異なつてクリオーリョ層に厳しい態度で臨み、その一方で本国商人とは親密な関係を築いた<sup>(70)</sup>。軍人にとつて総督のポストは次の昇進への重要なステップでもあり、商人との付き合いも経済的支援を得るといふ点で有益であった<sup>(72)</sup>。また商人の側も総督府が行なう事業（市場の建設、埠頭の整備、街灯設置など）を請け負うことで、利殖を増やすことができたのであった。

タコン総督の周囲には有力な本国商人が「取り巻き集団」を形成したが、その一人にカタルーニャ出身のフランセスク・マルティ Francesc Martí がいる。彼はバルセローナから一八一〇年ごろ移住してきたが、ハバナでは「パンチョ（フランシスコの愛称）・マルティ」として知られていた。歴代総督と親密になつて、密輸の取り締まり、魚市場や船の修理用ドックの建設、運営を任され、また労働力としてユカタン半島から先住民を密かに運んだこともある。タコンの名を冠した壮麗な劇場も私費で建設したが<sup>(73)</sup>、それは当時ラテンアメリカで最大規模

を誇り、現在でもガルシア・ロルカ劇場の一部として残っている。また、先に述べたサルバドール・サマーも総督の取り巻きの一人であった。

一方、サトウキビ農園や製糖所をもつ有力クリオリヨたちは、タコンのこうした姿勢に反発した。特に、長年島の財務監督官 (intendente) を勤め、現地社会で強大な影響力をもっていたマルティネス・デ・ピニーリヨス (ピリヤヌエバ伯爵) はその急先鋒であった。二人の間には個人的な確執もあったが、その背後には「本国人」と「クリオリヨ」、「商人」と「農園主・製糖業者」という、二重の意味で対抗する異質な勢力間の緊張があった。<sup>(74)</sup> 農場主たちは高価な奴隷や機械類を必要とし、常に資金不足に悩まされていたが、<sup>(75)</sup> 本国商人たちはそこにつけ入り、サトウキビの収穫や製糖所などを担保にして一〇%を越える高利で資金を貸し付けたのである。こうして返済できなかった中小規模の製糖所は本国商人の手に渡っていった。

タコン総督には、島の製糖業者の後ろに警戒すべき相手、合衆国の影が見え隠れしていた。財務監督官が砂糖を運搬する鉄道を敷設するために、英・米資本による資材や技術の導入をはかろうとしたが、「合衆国の侵略」

という強迫観念に悩まされていた総督は、島の防衛という観点からそれに反対した。<sup>(76)</sup> 地元の支配層に対し警戒心を怠らない彼だからこそ、本国商人がより一層心強いパートナーと映ったことは間違いない。タコンが市内に建設を命じた劇場と新監獄は、島民にとって「アメ」と「ムチ」の植民地政策を象徴するものであり、スペインの支配を永続させようとする総督の強い意志を表わしていた。

キューバにおける製糖産業の発展、本国政府による関税措置、公権力の保護下での奴隷売買や金貸し業、植民地行政府との癒着関係、こうした有利な条件と環境のおかげで本国商人は島の経済のヘゲモニーを掌握することができたのである。そしてその中でも、一九世紀前半に最も存在感を示していたのがカタルーニャ商人たちであった。クリオリヨ出身でメルラン伯爵夫人となったマリア・デ・ラ・メルセー・サンタ・クルス (一七八九—一八五二年) は、本国からの移住者にすぎないカタルーニャ人が「島に無一文で到着するが、最後には大きな財産を手に入れる。その巧さと金銭のやりくりで成功しはじめ、高い金利で金を貸し、ついには先祖からの最も美しい遺産をわが物にしてしまう<sup>(77)</sup>」と嘆いている。

五 キューバのカタルーニヤ人

伝統的なアルパルガタ（編み上げサンダル）とバレティナ（帽子）という出で立ちに、荷物は着替えだけのみすばらしいカタルーニヤ人移民たちは、移住先のキューバでどのように受け入れられたのだろうか。また、その暮らしぶりや彼らのネットワークはどのようなものであったのだろうか。

到着したばかりの移民にとって、頼りは先に移住した親戚や同郷者で、まず彼らの経営する商店に身を寄せるのが常であった。当時、島での事業は基本的に家族経営で行なわれ、外部との資本提携も少なく、為替・信用業務の機能も未熟で銀行もなかった。そのため商取引の決済は信頼できる人を介して行なわれなければならず、特に一九世紀に「非合法」とされた奴隷貿易では、事を秘密裏に運ぶ必要から、家族や親族間の絆がいつそう重要視されたのである。「信頼の置ける」人物は、何よりも同じ血縁集団、あるいは同じ出身地、言語・商習慣・その他の文化的規範などを同じくする集団の中に探し求められた。例えば、前述したシフレ・カザスは二十歳でハバナに着いたとき、紹介状を三通たずさえていた。一

つは父親の元事業パートナー、二つ目は自分のおじ、最後は同郷者に宛ててであった。<sup>(78)</sup>後に自分が皮なめし工場を所有するようになったとき、彼を頼ってやって来た若者が本当に自分の出身地であるかどうかを確かめるため、彼は祈りの文句を唱えさせた。自分の出身地アレニス・ダ・マルでは祈りの途中に町の守護聖人「聖ゼノン」の名を挿入するのが慣わしだったからである。<sup>(79)</sup>同じ町出身ということ、彼の下で働いたための最良の紹介状であった。

彼らはまず見習いとして出発し、「ビスケットをかじりながら」<sup>(80)</sup>「日の出とともに起き、強烈な太陽の下で休むことなく働き」<sup>(81)</sup>、わずかな資金を蓄える。ジユゼツプ・ビダルというある移民は「お母さん、仕事はとてもしついです。というのも、朝三時半に起き真夜中に床につく日もあるからです。睡眠時間は三時間半しかありません」<sup>(82)</sup>と書き送っている。貯金を元手にやがて小さな商店（雑貨店など）を開くが、店はせいぜい三メートル四方のごく小さなもので、夜になるとショーケースの後ろは台所や寝床に早変わりした。その後、うまく行けば一階が店舗、二階が住居という広い家に移ることができた。<sup>(83)</sup>節約と労働で財を築いたあるインディアノスは、自分の

遺言書の中で「私には譲り受けた財産は一つも無く、全ては私の労働によるものである。早い時期から今日まで、ある時には店員として、ある時には商事会社の共同経営者として働いてきた」と振り返っているが、そこには自分の力だけで社会的上昇をとげた人間の自負がうかがえる。

「額に汗して働くのは奴隷の役割」といった社会的風潮の強いキューバ社会において、カタルーニヤ人移民の働きぶりはともすれば「非の打ち所のないユダヤ人」<sup>(84)</sup>「*dios completos*」、「キリスト教世界のイスラエル人」<sup>(85)</sup>「*israelitas de la cristiandad*」という言葉で揶揄された。

島に滞在する外国人たちも、カタルーニヤ人が「スペイン人」の一般的イメージからはかけ離れていると評している。例えば、米国人アボット牧師は「われわれが十把一絡げにしてスペイン人に帰してしまう属性を「カタルーニヤ人は」ほとんどもっていない」と述べている。<sup>(86)</sup>

「質素で勤勉なその人たちを、「私は」クリオーリヨのよいうに軽蔑のまなざしではなく、むしろ最大限の敬意をもつてみる」といった肯定的な評価もあった。米国人医師ワードマンも、カタルーニヤ人が「勤勉で、賢く、儉約上手な人びとで、スペインのユダヤ人 (Spanish Jews)

というあだ名をもらったのは、おそらくそうした彼らの性格ゆえであろう」と指摘している。<sup>(88)</sup>

カタルーニヤ人をはじめ移民は港を中心とする地区に暮らしていた。ハバナの通りで外国人旅行者の目を引いたのはクリオーリヨではなく、「器用なビスカーリヤ人、実直で活発なカタルーニヤ人、疲れ知らずのガリシア人、働き者で慎重なアストゥーリアス人」といった本国から移民たちであった。港でもカタルーニヤ人たちの働きぶりは目立ったよう、陸揚げされる商品を彼らが買占めることもあり、互いに干渉することなく、業種別に「住み分け」を行なっていたらしい。<sup>(90)</sup> 船が入港すると真っ先に甲板に上がり、商談をすばやくまとめ、またたぐ間に商品を仲間内でさばいていく。その連携の妙を、あるフランス人は「商売の名人で、まれに見る協調の精神で事を運ぶため、いかなる外国商人も太刀打ちできない」と評している。<sup>(91)</sup> 彼らは港から内陸にも入り込み、砂糖やタバコ、ロンなどの製造にも乗り出した。現在でも高級銘柄として知られている葉巻「パルタガス *Partagas*」やラム酒の「ロン・バカルディ *Ron Bacardi*」の<sup>(92)</sup> 創業者は、カタルーニヤからの移民あるいはその息子である。

ガリシアやアストゥーリアス出身者がハバナに集中する傾向があったのとは対照的に、カタルーニャ人のネットワークはまるで「タコの足」のように島全体に広がっていた。それは港の有力卸問屋から内陸の小売商へと階層化され、「粗末な荷物の露天商から品揃えの豊富な村の商店まで、内陸におけるあらゆる段階での商いを独占しているようであった<sup>(94)</sup>」。一八三二―六五年にキューバで登録された商人のうち、およそ五二%がカタルーニャ出身者で、スペイン人商人だけに限ると、その比重は七割近くにまで達した<sup>(95)</sup>。特に、島の東部にある港町サンテアゴでは商人の八割がカタルーニャ人で、これらの地域では「カタラン」とは「小売商」のことを意味するほどであった。作者不詳のある四行詩（クアルテタ）には、黒人が「白人だったらなあ、たとえ<sup>(96)</sup>カタランでも *Quien fuera blanco aunque fuese catalán*」と嘆く場面があるが、この「カタラン」とはやはり雑貨店主をさしている。商業分野で働くカタルーニャ人がいかに多く、島内の流通で重要な役割を果たしていたかがうかがえる。

移住者は出身地との関係が切れていたわけではなく、むしろ手紙などを通してカタルーニャと頻繁に情報のやり取りをしていた。残された家族、親族の結婚や病氣、

死といった近況、あるいは故郷での様々な事件などを遠いキューバで知ったのである。商売上、カタルーニャに残っている一族や友人の誰かを新たに呼び寄せることもあれば、新しい人物の到着と入れ替えに誰かが帰国する場合もあった。「アバナ・チカ（リトル・ハバナ）」とよばれたビラノバ・イ・ラ・ジャルトルーからは主にハバナへ、またその北隣のシツチェスからはサンテアゴへという具合に、若者たちはこのネットワークを伝って移住し、また帰国した。彼らの目的はキューバに永住することではなく、そこで「成功し資産を蓄える<sup>(97)</sup> *hacer las Americas*」、そして故郷に凱旋することであった。移住者が蓄えた資金もまた、このネットワークを通して島外に持ち出された。インディアノスたちは、息子や代理人をキューバに残し、本国から手紙で指示を出しながら、必要な時に資産の一部（あるいは全部）を為替などで送金してもらった。

#### 六 インディアノスとカタルーニャの近代化

沿岸港町から若者たちがキューバを目指して移住していったころ、カタルーニャの内部では急速な社会変化が起こりつつあった。この点について、歴史家 J・フンター

ナは「もし危機の時代が全て同時に変化の時代でもあるとしたら、カタルーニャの社会活動における変化を捉える必要がある」、「カタルーニャ経済がすでに別の道を歩み始めていることを忘れ、一八二〇年代以降の社会を植民地交易の熱狂的時代と比べて悲観的に見るのは誤りだ<sup>(98)</sup>」と述べている。ではこの「別の道」とは何なのだろうか。それは商業ではなく、工業生産を中心とする経済社会の形成である。植民地市場を失った後、カタルーニャの綿産業はスペインの国内市場に重点をシフトしながら成長していった。一八三三年に設立された繊維工場「ボナプラタ」は蒸気機関を備えた最初の近代工場で、バルセローナ発展のシンボルとなる。機械化された綿工場が、石炭の運搬に便利な沿岸部に沿って建てられていった。

工業化の進展と共に、街の姿も変わっていく。自由主義政権の下で封建的諸特権は徐々に廃棄され、デサモルティサシオン (desamortization) とよばれる教会などの「永代所有財産」の市場解放が実施された。これによりバルセローナをはじめ沿岸各都市で教会や修道院の取り壊しが進められ、跡地にはブルジョアの邸宅や市場などが建設されていった。中世の市壁や港の城壁も取り壊

され、バルセローナでは「ラス・ランブラス Las Rambas」が港に通じる目抜き通りとして整備され、旧街区の外延には「アシャンプラ Eixample」とよばれる碁盤目状の新市街が造成されていった。

では、アメリカからの帰国者たちは、こうした工業化や都市化にどのように関わったのであろうか。この点について『ラス・アンティールヤス Las Antillas』紙の第一号(一八六六年)は「海外植民地資本の推進力のおかげで、カタルーニャの機械は動き出し、街の装いは一新され、以前は不毛だった荒地が潤い、そしてスペイン近代化の旗頭はカタルーニャであるという名声が紺碧の空に轟きわたる<sup>(99)</sup>」と明快に述べている。また一九〇〇年、港町シツチェスの週刊誌『エル・エコ・デ・シツチェス Eco de Sitges』には「シツチェスを近代的にしたのはまさにキューバ島である」との意見が寄せられた<sup>(100)</sup>。この街には「キューバ島通り」や「F・グマー通り」など植民地やインディアノスにちなんだ名前をもつ通りがあり、現在彼らの瀟洒な家は主要な観光資源の一つとなっている。またピラノバ・イ・ジャルトルーでも、中央広場や目抜き通りには「アメリカ帰り」の邸宅が並び、町の至る所で彼らが建てた給水塔やガス灯、公園、高齢者施設

などを目にする事ができる。

インディアノスは一八三〇年代ごろに帰国し始める。彼らはキューバとの関係を完全に清算したわけではなく、多くの場合、事業を息子や親戚、あるいは友人たちにまかせ、婦人や幼い子供たちを引き連れて戻ってきた。その子供たちもやがて大きくなれば、父親のようにまたキューバに渡ることになるかもしれない。インディアノスは自分の生まれた町にもどる場合もあったが、新たな事業を展開しようとする者は、経済・商業の中心地バルセロナに落ち着いた。カタルーニャの移住者は十代で渡航する者が多かったので、キューバで一財産を築いて帰国しても、年齢的にまだそれほど年老いていない。それが、単に「余生」を送るだけの生活にとどまらなかった理由の一つであろう。

近代化との関係においてまず挙げなければならないのは、鉄道建設である。スペイン最初の鉄道（一八四八年）はインディアノスによって建設された。その功労者はミケル・ビアダ・イ・ブニョル Miguel Biada i Bunyol である。彼はアレニイス・ダ・マルの航海学校で操舵術を学んだ後、マラカイボに移住する。しかし、シモン・ポリーバルの軍隊がベネズエラを解放後、キューバに移

り、タコン総督の取り巻きの一人となる。彼は、キューバにおける鉄道建設に刺激を受け、帰国後バルセロナから自分の生まれ故郷マタローに至る四〇数（四）に鉄道を敷いた。その幅広い人脈を駆使し、カタルーニャだけでなく英国やキューバからも資金調達に成功している。また、バルセロナから南へ向かい、港町シツチェス、ピラノバを通り、バイスに至る路線もインディアノスの資本になるものである。その中心人物はピラノバ・イ・ラ・ジャルトルー出身のフランセスク・グマー Francesc Guma で、彼は父親が建てた繊維工場で働くことに満足せず、一六歳でキューバのマタンサスに渡った。主にカタルーニャ、キューバ、ラ・プラタ間の交易で財を蓄え、七一年に帰国する。鉄道敷設のために彼が立ち上げた鉄道会社には、キューバの多くの都市から資本参加があった。鉄道は三年の歳月をかけて開通された。（四）

第二に工業部門への投資である。商業から工業の世界に転身し、カタルーニャの産業発展に尽くしたインディアノスの典型としてジュアン・グエイを挙げなければならない。彼は父のいるサント・ドミンゴに九歳で渡ったが、事業失敗の後バルセロナに戻され、航海学校を卒業した。その後今度はハバナに移住し、織物問屋で働き

始める。やがて友人たちと共同出資して商店を構え、ハバナ港に陸揚げされる商品を手広く扱うまでに成長した。三〇代で財を築いた彼は、早々にキューバの事業を清算し、三五年に帰国する。購入したフリゲート（快速帆船）が難破してかなりの財産を失ったが、それ以降もつばら工業部門で活動するようになる。彼の義理の兄が紡績工場を所有していたこともあり、当時はまだバルセロナの市外地であったサンツに大規模な綿織物工場「バルポール・ベイ」を建設した。また鑄物工場の建設やバルセロナ銀行への出資などで事業を拡大し、名門グエイ家の基礎をつくったのである。政治活動にも積極的に関わり、保護貿易主義を唱えてカタルーニャ・ブルジョア層の利益を代表し、キューバで独立紛争が勃発すると、あくまで独立反対を主張した<sup>(103)</sup>。

ジュアンの遺産を受け継いだ息子のアウゼビ・グエイは事業家としてよりも、建築家ガウディのパトロンのして有名である。若いころガウディはジュアン・マルトレイの工房で働いていたが、この工房はカンタブリア海に面したコミーリヤスにあるアントニオ・ロペス家の礼拝堂付き霊廟の建設を手がけていた。アウゼビはアントニオの娘と結婚していたので、マルトレイの工房を通して

彼とガウディは接触するようになった<sup>(104)</sup>。アントニオ・ロペスについてはすでに「奴隷貿易」のところでも取り上げたが、コミーリヤス出身の移民でありながら、後に事業家として成功し、スペイン国王とも親しくなる人物である。

第三に、インディアノスたちが例外なく手がけたのが不動産投資である。バルセローナは市壁を越えて膨張しつづけ、一八六〇年には城壁そのものも取り壊された。新市街の造成が始まると、彼らは潤沢な資金で「パセツチ・ダ・グラシア Passeig de Gracia」などの通りに面した優良地を買い集める。さらに六八年にキューバで独立闘争が始まり、また国内でも一八七二年に第三次カルリスタ戦争が始まると、バルセローナの不動産投機は再び過熱する。キューバやカタルーニャ内陸の町から逃げてきた人びとが、バルセローナでこぞって住宅を購入し始めたためである。

こうした不動産投資の「さきがけ」として有名なのが、一八三一年に帰国したシフレール・カザスである。彼はスペイン独立戦争でスペイン産漆 (Hondo) の輸入が途絶えた時、キューバでマングローブの樹皮や葉を利用して<sup>(105)</sup>皮をなめし、他の業者を尻目に利益を得たとされている。



写真1 シフレー・アーケード

(筆者撮影)

さらにニューヨークに進出し、キューバ産皮革を米国市場で販売して巨額の資産を成した。彼がカタルーニャに戻ってきたとき、ちょうどバルセローナ港の市壁が取り壊され、跡地の競売が行なわれた。その何区画かを彼は購入して豪壮な建物を建設し(写真一)、当時の人びとを驚かせたのである。一階部分は「シフレー・アーケード *els porxos den Xifre*」と呼ばれ、柱上部のレリーフには錨や帆、砂糖箱やコーヒー袋を積み込むキューピット、あるいはアメリカの珍しい動植物などが彼のイニシヤルと共に刻み込まれている。(写真二) この跡地の競売にはシツチェス出身のインディアノス、ビダル・クアドラス兄弟も参加して何区画かを購入したが、タコン総督の取り巻きの一人サルバドル・サマーはシフレー・カザスに競り負けた。

市内には「ラス・ランブラス」という目抜き通りがあるが、そこに面した二つの壮麗な館「パラウ・モジャ *Palau Moja*」と「パラウ・マルク *Palau Marc*」を買い取り改装したのもインディアノスたちであった。それぞれアントニオ・ロペスの一家と、バルセロナ(市壁外にある漁師・船乗りの集住地区)出身のトマス・リバルタ・セラ *Tomás Ribalta Serra* が入居した。このように



写真2 レリーフの寓意像

(筆者撮影)

住居やインテリアにかける彼らのエネルギーには並々ならぬものが見受けられる。

帰国後もインディアノスたちは交友関係を維持し、婚姻や事業を介して相互に結びついていた。バルセローナ港を見下ろすモンジュイックの丘近くには「フォン・トルバタ」と呼ばれる野外休息所があり、隣接する簡易レストランではカリブ海料理、ロン、そしてキューバ産葉巻が振舞われた<sup>106</sup>。裕福な家系の娘がもたらす持参金も、蓄財に心血を注ぐ移民にとって重要なものである。グエイ家の初代ジュアンはキューバでお世話になった裕福なイタリア商人の娘二人と相次いで結婚し、ロペス家の初代アントニオも、サンティアゴ・デ・クーバで知り合ったブル家の娘ルイサと結婚し、彼女の多額の持参金のおかげで自分の会社（奴隷貿易に従事）設立にこぎつけている。彼は帰国後「大西洋横断汽船」や「フィリピン・タバコ会社」、キューバの税関業務を代行する「イスパノ・コロニアル銀行」など植民地と関りの深い企業を設立していくのであるが、これらの会社経営にはグエイ家の二代目アウゼビも参加していた。彼はアントニオの娘と結婚していたので義理の息子でもあったのだ。ロペス家に連なる人々は夏になると、アントニオの出身地コミ

ーリヤスの別荘に滞在し、親族の絆を深め合った。ガウ  
デイの作品の一つ「エル・カプリチヨ El Capricho」  
がカタルーニヤから遠く離れたカンタブリアの地に建て  
られた理由もここにある。アントニオ・ロペスの後継者  
クラウディオはキューバでの共同事業者ガヨン家から嫁  
を迎えたが、結局跡継ぎなく死去したので、ロペス・グ  
ループの資産は全てグエイ家が引き継ぐことになった。

彼らは叙勲や叙爵によって社会的上昇をも果たしてい  
る。国王と親しかったアントニオ・ロペスは、スペイン  
政府に貢献したとしてコミーリヤス侯爵に列せられた。  
グエイ家も一代目のジュアンこそ爵位を受けることを辞  
退したが、二代目のアウゼビは一九〇八年に伯爵を、三  
代目のクラウディオとサンティアゴはそれぞれ子爵と男  
爵の位を授かっている。この世代になると男性はグエイ  
家と同格の新興貴族の娘と結婚し、女性は格式の高い古  
い貴族の家に輿入れしている。こうして有力なインディ  
アノスたちは経済力だけでなく社会的ステータスも向上  
させつつ、やがてバルセローナの名家と称される少数の  
限られたグループに組み込まれていった。

彼らの華やかな生活ぶり、服装や趣味、あるいは奴隷  
を連れ帰ったことなど、<sup>(108)</sup>彼らの行動は新聞や小説、演劇

などに取り上げられ、それが「アメリカでの成功」を夢  
みる若者をさらに移住へと向かわせた。一八六〇年代、  
バルセローナの庶民に熱狂的に読まれた連載小説『バル  
セローナとその秘密 Barcelona y sus misterios』には、  
キューバで財を成した元奴隷商ペドロ・ブランコという  
人物が登場する。彼は自分の暗い過去を知るある人物の  
存在におびえ、その男から脅されつつ、罪滅ぼしのため  
に慈善事業を行う。そして市民からはりっぱな人物と慕  
われながら一生を終えるのである。<sup>(109)</sup>

しかし、ジュアン・グエイやアントニオ・ロペスなど  
のように成功して帰国できたのはほんのわずかの人たち  
であった。当時は航海自体が危険なもので、キューバに  
向かう船上で病死することも珍しくなく、無事到着して  
も黄熱病などの風土病にかかる者、働いても思い通りに  
行かず貧しいまま亡くなる者、失意のうちに故郷に舞い  
戻ってくる者の方が圧倒的に多かったのである。実際、  
ジュアン・グエイの父親はアメリカ交易で数回の破産を  
経験したし、ジュゼップ・シフレーの父親も商いに失敗  
して負債を抱えたまま亡くなった。港町シツチェスでは、  
着の身着のまま帰国することを「ジブラルタル」海  
峡で旅行カバンを無くした<sup>(110)</sup>とよんでいたが、一七七八

年——一九三六年にこの町からアメリカへ移住した五四〇人のうち、晩年を故郷で過ごすことがきたのは二三一人(四三%)で、半数以上が異郷で亡くなっている。<sup>(11)</sup> 壮麗なタコン劇場を建てた「パンチョ・マルティ」でさえ、ハバナに渡ってきた当初は黄熱病を患い、ようやく建てた酒倉を二度も焼失する不運に見舞われた。塩漬け魚(cherna)だけで食いつなぐ日々も経験し、カタルーニヤから彼を慕ってやって来た妻と娘は熱帯の気候に耐えられず、まもなく病死した。<sup>(12)</sup> 下水道や排水溝の不備、ごみ収集の悪さ、劣悪な石畳からまき上がる小石や粉塵、動物の糞尿、こうした不衛生な環境は疫病を頻発させ、一八三三年にはわずか二ヶ月で八千人の死者を出している。経済は拡大するのに、あふれる浮浪者や物乞い。これらはスペインの統治機関が公共衛生や市民生活の改善を長年にわたり看過し、放置してきた結果でもあった。恵まれない同郷者を救うために、移民たちは独自に慈善団体を組織し始めるが、その中で最初に設立されたのが「カタルーニヤ出身者慈善協会」<sup>(13)</sup>である。身分や政治的信条に関係なく、全てのカタルーニヤ人を包括するもので、その活動には、貧しい同郷者を保護しその最後を看取り埋葬すること、また旅費に事欠く帰国希望者を帰還

させることなども含まれていた。

## 七 近代化と移住

最後に、カタルーニヤにおける工業化と社会変化がカタルーニヤ人の移住のあり方にどのような影響を及ぼしたのかを見てみよう。

図表(二)はバルセローナとそれ以北の三つの港町から、一九世紀前半から半ばにアメリカへ移住した人を職業別に示した表である。<sup>(14)</sup> これをみると、第一に、実に様々な職種の人が移住していることが分かる。これは自由主義政権の下で渡航の「規制緩和」が進んだことを表している。一八二〇年代にアメリカ諸国の独立が動かしがたい事実となると、スペイン政府は二七年、「交易自由化令」を撤廃し、植民地の統括機関であった「インディアス評議会[Consejo de Indias]」も廃止した。その結果、伝統的な渡航規制もなくなり、王室の許可なくアメリカへの渡航が可能になる。さらに一八三四年に自由主義稳健派政権が誕生すると、家族の承認、徴兵・納税義務の履行違反の有無、犯罪歴の有無といったいくつかの条件をクリアし行政手続さえ済ませれば、<sup>(15)</sup> 渡航に制限を加えられることもなくなった。こうして聖職者や役人、

図表（２） アメリカへの移住者（職業別）

	サン・ファリウ・ ダ・ギショルス 1835と1862		ブラナス 1818-1861		アレニス・ダ・ マル 1828-1852		バルセローナ 1835-1849	
	人	%	人	%	人	%	人	%
	地主・工場主……………	9	1.0	—	—	1	1.0	24
商人……………	98	11.4	31	13.3	22	21.2	200	15.4
自由業……………	11	1.3	1	0.4	4	3.8	174	11.3
学生……………	176	20.5	33	14.2	1	1.0	81	6.3
海運業者……………	126	14.7	57	24.5	22	21.2	60	4.6
船主……………	20	—	—	—	—	—	—	—
層舵手……………	14	—	—	—	—	—	1	—
船員……………	61	—	—	—	1	—	18	—
船大工……………	4	—	53	—	16	—	4	—
塗装工……………	5	—	2	—	2	—	7	—
帆職工……………	—	—	—	—	—	—	28	—
漁師……………	—	—	1	—	—	—	—	—
その他……………	22	—	1	—	1	—	2	—
手工業者……………	349	36.8	77	33.0	36	34.6	680	52.5
左官……………	17	—	1	—	2	—	70	—
大工……………	25	—	15	—	—	—	119	—
菓子職人……………	—	—	3	—	2	—	—	—
サンダル職人……………	4	—	3	—	—	—	—	—
鍛冶職人……………	2	—	5	—	—	—	68	—
パン職人……………	17	—	11	—	6	—	60	—
仕立て職人……………	12	—	2	—	7	—	71	—
縄職人……………	2	—	6	—	—	—	15	—
コルク職人……………	174	—	4	—	3	—	—	—
職工……………	5	—	—	—	3	—	40	—
靴職人……………	47	—	7	—	14	—	70	—
その他……………	41	—	19	—	4	—	167	—
召使……………	5	0.5	—	—	2	1.9	6	0.5
農民……………	29	3.4	14	6.0	12	11.5	45	3.5
(日雇い)労働者……………	51	5.9	20	8.6	3	2.9	11	0.8
その他……………	6	0.7	—	—	1	1.0	42	3.2
合計……………	860	100.0	233	100.0	104	100.0	971	100.0

出典：C. Yáñez Gallardo. *Saltar con Red*, p.129.

軍人、商人以外の一般人にも移住への道が開かれていった。

次に海運業者・商人と手工業者の二つの集団を比較してみよう。前者は伝統的な渡航者集団といってよく、いずれの港町でも全体の二割から四割を占めている。しかし、職人たちがそれを上回るかたちで移住していることは興味深い。レンガ職人や大工、鍛冶屋、パン屋、靴職人など実に多くの手工業者たちが海を渡っていった。これはラテンアメリカで都市建設が進み、こうした職人や熟練労働者への需要が増えたことが一つの原因と考えられる。と同時に、カタルーニャの伝統的産業構造の変化も関係している。特に中心地バルセローナで彼らの移住が全体の五〇%を越えていることは、工業化・都市化によって伝統的な職人がこの都市の労働市場から排除されつつあることを物語っている。サン・ファリウ・ダ・ギショルスなどバルセローナ以外の港町でも、職人たちの比重はいずれも三割を越えている。サン・ファリウでは「タポネロス」とよばれる伝統的なコルク職人も移住している。他方、いずれの町においても農民の移住はまだ少なく、カタルーニャからの移住が「大量移民の時代」と性格を異にしている点である。

スペインにおける伝統的社会的変容と人の移動

第三に、海運業者の集団をさらに詳しく見てみよう。

船主、船長、船員など実際に船に乗り込む者以外に、船大工やタール職人、帆布職人といった造船関連の職人が移住している。ブラスでは五三人の船大工が、バルセローナでは二八名の帆布職人が、また「カラファタス」と呼ばれる塗装職人（船体に水が浸水するのを防ぐタールを塗りこむ職人）も移住している。船大工たちはモンテビデオなどラ・プラタ地方に移住して行ったが、そこでは干し肉（*tasajo*）の製造・輸出を営むカタルーニャ人移住者たちが、自分の持ち船の修理に彼らが必要とし、また地元の造船所への斡旋も行なってくれたからである。<sup>(16)</sup> 彼らの移住の原因はカタルーニャの造船危機である。<sup>(17)</sup> バルセローナから北に続く沿岸部では、伝統工法による木造船建造が盛んであった。しかし、外国船の参入と船舶の大型化、世紀中ごろの「蒸気船」登場、近代的工法による「鉄の船」の建造は、船大工やタール職人らを通去のものとして葬り去り、帆布や索具製造者の仕事も奪ってしまった。さらに、大型の外国船を雇える貿易商人たちは、バルセローナのような整備の進んだ近代的港に活動の拠点を移したため、それ以外の小さな港町は衰退していった。名高いアレニス航海学校が一八七四年に最

最終的に閉鎖されたことは、帆船の時代が終わりを告げたことをはっきりと物語っている。そして一八八〇年代からの「大量移民の時代」、移住者は沿岸の小さな港町からではなく、バルセローナ港に停泊する蒸気船に乗り込んで出て行ったのである。

#### 八 終わりに

一八世紀末からの時代の転換期におけるカタルーニャ人の移住を探ってきた。帆船による移動、地中海沿岸港町からの若い独身男性の移住、植民地における商業活動への従事、そして親族や同郷者のネットワークを通じてのカタルーニャ・キューバ間の往来、これらの点で彼らの移住はアンシャン・レジームの危機以前にみられた「交易自由化」時代の伝統的商業移住の延長線上にあり、その最後の波であったといえる。しかし、そこには、キューバ製糖業の発展とスペインによる植民地統治の強化、関税政策による外国商船の締め出しといった一九世紀固有の条件が作用していた。それゆえ本国からの移住者は、奴隷貿易やクリオーリョ農園主への高利貸し付けによつて、比較的短期間に資産を形成することが可能となったのである。

その一方、伝統的移住と異なる点は、自由主義政権下で王室による渡航制限が撤廃され、渡航条件も緩和され、海運業者や商人以外に実に雑多な職種の人びとが移住し始めたことである。その中には船大工や帆布職人、コルク職人と言った伝統的職人も含まれていたが、これはカタルーニャ内での工業化による産業構造の変化を反映したものと見える。そして、移民たち自身も帰国後にはこうした社会変化に積極的に関与していったのである。「インディアノス」とよばれる成功移民は、その潤沢な資金によって、鉄道や工場の建設、不動産投資などを通してカタルーニャの工業化、都市化のプロセスを一層推し進めた。そして、彼らの派手な生活スタイルは、新聞や文学、演劇などに取り上げられ、この時代を彩る社会風俗の一つともなった。

カタルーニャからキューバへの移住は一八三〇―四〇年代をピークに、その後徐々に衰えていく。世紀後半の奴隷制廃止や独立闘争の開始で、移民を引きつけていた要因に変化が生じたからである。また、工業化をとげたカタルーニャ経済が、彼らに海外移住とは別の選択肢を提供するようになったことも影響している。その結果、キューバのスペイン人社会におけるカタルーニャ人の割

合は低下し、二〇世紀初頭には前世紀中頃の半分以下にまで縮小する。一八八〇年代からの「大量移民の時代」、スペイン北部や北西部では、斡旋業者によって多数の農民が契約労働者として駆り集められ、蒸気船でカリブ海のみならず南米やベネズエラなどにも運ばれていった。しかし、この時すでにカタルーニャは移民の送り出し地域ではなく、逆にスペイン南部や隣接地域からの移民労働者を受け入れる側としての性格を強めていたのである。

#### 註

(1) カタルーニャ語の人名や地名は、グエルなどすでに日本で知られている場合も含め、見苦しくない範囲でできるだけ原音に近い表記を心がけた。固有名詞以外の一般名詞は基本的にスペイン語での発音表記とする。また、「」は筆者による補足を示している。

(2) 植民地時代の研究者イーダ・アルトマンは、「人の移動」への関心が薄かった理由として次の二点をあげている。①スペインとスペイン領アメリカを分離して扱う歴史学の伝統があったために、移民やスペインとアメリカとの関係のようないずれの分野にも容易に分類しがたいテーマは、なおざりにされてきた②植民地社会を形成した他の二つの集団—アメリカ先住民と奴隷として新世界に連れてこられたアフリカ人—が近年ますます注目され

スペインにおける伝統的社会的変容と人の移動

だす一方で、ヨーロッパ中心主義への反動が生まれたこと。関、立石編訳『大航海の時代 スペインと新大陸』同文館、一九九八年、二〇七頁。

(3) カタルーニャ州政府は「アメリカ発見五百周年カタルーニャ委員会」を設立し、四回にわたりカタルーニャ・アメリカ間の人の移動に関するシンポジウムを開催した。その報告要旨が *Actes de les Jornades d'Estudis Catalano-Americans* (開催年度 1984, 1986, 1988, 1990) にまとめられている。今後の研究課題として、各地でばらばらに進められている史料の発掘や研究成果を総合し、俯瞰的なビジョンを構築すること、また移民数の確定という「数量化研究」と手紙などのミクロ分析によって移民生活の内実を探ろうとする「質的研究」との統合などが残されている。C. Martinez Shaw, *La emigración española a América (1492-1824)*, Colombres (Asturias), 1994, p. 10, 16-17.

(4) カルリスタとは絶対主義の堅持を主張する伝統的な勢力で、フェルナンド七世の弟カルロスを支持したのでこう呼ばれた。国王が財政建て直しのために自由主義穏健派に近づくと、それに反発してカルロスに期待を寄せるようになり、一八三三年に国王が死去すると、各地で反乱を開始する。これに地方の伝統的支配者である地方貴族や教会、経済の資本主義化に不安を抱く小農民などが加わった。カルリスタ勢力はバスク、ナバーラ、カタルーニャなどの山間部で根強く、一九世紀の間に三回反乱を繰り返し、一八七六年最終的に鎮圧される。

- (5) 移民の帰国とその影響という部分に光をあてた研究に以下がある。Josefina Cuesta Bustillo (coord.), *Retornos (De exilios y migraciones)*, Madrid, 1999. Xosé M. Nuñez Seixas, *Emigrantes, caciques e indianos*, Vigo, 1998. Vicente Peña Saavedra, *Éxodo, organización comunitaria e intervención escolar*, 2 vols., A Coruña, 1991.
- (6) アメリカ発見から一五〇年間の渡航者数が四五万人という数字はマグナス・モーナーの出したもので、妥当な数値として多くの研究者によって受け入れられている。一七世紀後半から一八世紀の渡航者数はほとんど分かっておらず、マリオ・エルナンデス・サンチェス・バルバが一九五〇年代に出した五万二千人(一八世紀)という古い推定値がある。Martínez Shaw, *op. cit.*, pp. 13-25. 大量移民の時期の数字は次を参照。N. Sánchez-Albórniz, *Españoles hacia América. La emigración en masa, 1880-1930*, Madrid, 1988, pp. 17-20.
- (7) P. Boyd-Bowman, "La procedencia de los españoles de América: 1540-1559", *Historia Mexicana*, vol. 17, núm. 65, 1967, pp. 38-39, p. 64 (表)。
- (8) Martínez Shaw, *op. cit.*, p. 137. これらの数字は、マンダルシアのカディスから出航した移住者だけを対象にしているのので、交易自由化の時代に地方の港から出て行った人を含めると、北部や北東部の比重はもう少し大きくになると考えられる。Ibid., p. 172, cuadro 5.1.
- (9) 全渡航者数のうちバスカ出身者の比重は約一〇%、ガリシア約六%、カタルーニャは約五%である。Ibid., p. 137.
- (10) J. M. Bernades, *Els catalans a les Indies (1493-1830)*, vol. 1, Barcelona, 1991, p. 323.
- (11) Ibid., p. 329. 役人・兵士、聖職者以外の職業は全て「自由業」というグループに組み入れられている。この「自由業」(三一九人、九・二%)の中で医者(四一%)とコロノスと呼ばれる入植者(一二%)が全体の半分以上を占め、海運業者(marins)は四五名(一四%)である。
- (12) Ibid., p. 337, cuadro 10. 商人や海運業者の存在が一八世紀に入って高まるのは、スペイン全体についても言える。例えば一六世紀にはスペイン人移住者における商人の割合は高く見積もっても五%程度だったのに、一八世紀後半には二三%に上昇する。Boyd-Bowman, *op. cit.*, 1976, pp. 592-596.
- (13) カタルーニャの歴史家フアン・スルデビラは「排除」がカタルーニャにとって「不幸 funesto」であったのはもちろん、スペインそして帝国全体にとってもマイナスであったと指摘している。Ferrán Soldevila, Ferrán Valls i Taberner, *Historia de Catalunya*, 1982, p. 390.
- (14) J. M. Ramón de San-Pedro, *Don Xifré Casas. Industrial, naviero, comerciante, banquero y benefactor. Historia de un indiano catalán (1777-1856)*, Madrid, 1956, p. 135 (Apéndice II).
- (15) カタルーニャのアメリカ進出を研究しているマルティネス・シヤウは、カタルーニャに根強いこうした考え方を「神話」と批判している。C. Martínez Shaw, *Cataluña*

en la Carrera de Indias 1680-1756, Barcelona, 1981, pp. 14-15. 「排除の神話」をめぐる議論は雑誌『ラベンス L'Avenç』(núm.15, 1979)の特集“Catalunya i el comerç americà”を参照。最近の研究では、独占交易体制下でもカタルーニャ商人がセビーリャやカディスに居留し、「間接的に」インディアス交易に關っていた実態が明らかにされている。

- (16) J. M. Delgado Ribas, “La emigración española a América Latina durante la época del comercio libre (1765-1820). El ejemplo catalán”, *Boletín Americanista*, núm 32, Barcelona, 1982, apéndice pp.128-137.」の中には二年以下の短期移住者は含まれていない。

- (17) Pierre Vilar, *Cataluña en la España moderna*, vol. 2, Barcelona, 1987, p.82.

- (18) 一七八〇年代にこの地方を旅行したフランシスコ・デ・サモラによると、「この二、三〇年でバルセローナとマタロー間に二千戸の家が新築された。Ibid., pp. 73-74

- (19) イタリヤとチュニジアを結ぶ線の西側が彼らの伝統的活動領域で、一五〇ノから一七〇ノ程度の中小帆船が沿岸を盛んに行き来していた。港町アレニスでは、一四歳以上の男性人口のうち、船乗り(見習いは除く)や船大工、タール職人など造船や海運などに関つて暮らしている人は半数以上に達し、女性の編むレース飾りもアメリカに輸出されていた。Ramón de San-Pedro, *op. cit.*, p.10.

- (20) J. Fontana, *Historia de Catalunya*, vol.5(*La fi de l'Antic Regim i la industrialització 1787-1868*), Barcelona, 2003,

スペインにおける伝統的社会的変容と人の移動

pp.82-83.

- (21) 一七六九年商業評議会 (Junta de Comercio) によつて設立されたバルセローナ航海学校はスペイン最古の学校の一つで、港に面した商品取引所 (Lonja) の中に開校されていた。その初代校長シニバルド・ダ・マスは一四歳から大西洋を横断する航海士であった。Facultat de Nàutica de Barcelona のウェブ・サイトより。[http://www.fnb.upc.es]

- (22) Vilar, *op. cit.*, vol. 3, pp.345-349.

- (23) バスクの「王立カラカス・ギブスコア会社」(一七二八年設立)をまねて、「王立バルセローナ貿易会社」が一七五五年に設立された。またカディスでの通関手続きが義務づけられていたし、交易が許可された範囲もインディアスの中では「周縁部」とされるカリブ海諸島や中米であったが、カタルーニャ人の関心を大西洋に向かわせるきっかけとなった。

- (24) 一八五三年からの七年戦争中、ハバナやマニラは一時英軍によつて占領された。占領期間は一ヶ月と短かったが、ハバナでは交易が自由化され、砂糖やタバコなど輸作物の生産が奨励された。また労働力として四千人に上る大量のアフリカ系奴隷が導入された。この町が再びスペインに戻つたとき、ハバナ経済の活況をみて、スペイン王室はインディアスにおける支配のあり方を抜本的に見直すことが急務であると痛感した。そして体制の延命をはかるために一連の改革が進められていった。「現状維持を望むためにも全てを変えるのだ」“que todo can-

bie para que todo permanezca igual”と云う当時の言葉は、この改革の本質を突いている。A. Santamaria Garcia, A. Garcia Alvarez, *Economía y colonia. La economía cubana y la relación con España, 1765-1902*, Madrid, 2004, pp.55-58.

(25) ただし商人や船乗り以外の一般の乗船客 (pasajeros) はカデイスから乗船しなければならなかった。

(26) 商人はインディアスに永住することは認められず、三年(その後六年)という制限期間内に帰国する義務があった。ただ、商品が売れなければ長く滞在しなければならず、商売上の責務を逃れるためにアメリカにとどまる場合もあった。交易の自由化が進んだ一八世紀末、滞在期限はほとんど有名無実と化した。期限が最終的に撤廃されたのは一八二七年に「自由化令」が廃棄された時である。

(27) J. M. Delgado Ribas, “El modelo catalán dentro del sistema de libre comercio”, J. Fontana (ed.), *El comercio libre entre España y América Latina, 1765-1824*, Madrid, 1987, p.65.

(28) J. M. Delgado Ribas, “Els comerciants catalans en la cursa de les Índies durant el segle XVIII”, *Terceres Jornades d'Estudis Catalano-Americans*, Barcelona, 1990, pp.84-85.

(29) Delgado Ribas, *Boletín Americanista*, pp.128-129.

(30) Martínez Shaw, *op. cit.*, p.188, cuadro 5. 4. 世紀末にな

るとベラクルス、カンペチエ、カルタヘナなどの町では、バルセローナやマタロー、トッサなどの資本力のある商人たちが少しずつ浸透しはじめる。

(31) Pablo Tornero Tinajero, “Comercio colonial i projecció de la població: L'emigració catalana a Cuba a l'època del creixement sucrer (1790-1817)”, *Terceres jornades d'Estudis Catalano-Americans*, p.241.

(32) カデイス商務館に登録されているカタルーニャ商人は計一三八名で、全登録者数(三、二五二人)の四・三%に相当し、その多くがバルセローナやマタロー、カネッなど地中海沿岸港町の出身者であった。アンダルシア商人や一部の外国商人のように特権的な商いに参加できるわけではなかったが、フロータス船に乗り込み、頻繁にアメリカとの行き来をしていたようである。まだまだ危険な大西洋航海を前に、彼らは遺言状、あるいは遺言状執筆の権利を他人に託す証書を書き残している。その中には自分が亡くなった場合の細かい遺産配分や鎮魂のために何回ミサをあげるか、その謝礼金の額なども記されている。Julian B. Ruiz Rivera, “La colonia mercantil catalana en Cádiz”, *Temas Americanistas*, vol. 8, 1990, p.16, p.21.

(33) David Jou i Andreu, “Els sitgetans a América: un intent de valoració quantitativa”, *Terceres Jornades*, p.112.

(34) Martínez Shaw, *op. cit.*, p. 173, cuadro 5.2.

(35) Ramón de San-Pedro, *op. cit.*, p.26.

(36) Yáñez Gallardo, *Saltar con la red: la temprana emi-*

*graciación catalana a América (1830-1870)*, Madrid, 1996, p. 219, figura 8.1.

(37) このような伝統的な報酬配分は「ア・ラ・パルツァ parts」とよばれ、船主と乗組員との間で「機微が分かる」というような古風な人間関係の成立を前提としている。こうした前近代的人間関係が崩れると、賃金の固定化、つまり船乗りの「プロレタリア化」に向かうとされる。Vilar, *op. cit.*, vol. 3, pp.308-309, 324.

(38) Vilar, *op. cit.*, vol. 2, p.74.

(39) Vilar, *op. cit.*, vol. 3, p.267.

(40) J. Fontana, "La primera etapa de la formació del mercat nacional a Espanya", U. de Barcelona, *Homenaje a Jaime Vicens Vives*, II, Barcelona, 1967, p.158.

(41) P. Torrero Tinajero, *Crecimiento económico y transformaciones sociales. Esclavos, hacendados y comerciantes en la Cuba colonial (1760-1840)*, Madrid, 1996 p.241.

(42) Ramón San-Pedro, *op. cit.*, p.21.

(43) J. Fontana, *Historia de Catalunya*, vol.5, pp.138-139.

(44) 一八一〇年代に南米のモンテビデオから締め出されたスペイン船は、リオ・デ・ジャネイロ（ブラジル）に寄港し、そこでモンテビデオに入港できる船籍（bandera de conveniencia）を買い取らなければならなかった。その結果、ブラジルを中継地とするスペインとラ・プラタ地域間の密貿易が盛んになった。

(45) A.Guerrero Latorre, S.Pérez Garzón, G.Rueda Hernanz, *Historia política 1808-1874*, Madrid, 2004, p.110.

スペインにおける伝統的社会的変容と人の移動

(46) J. M. Fradera, "El comerç durant el segle XIX", *Comercio entre Catalunya i América, segles XVIII i XIX*, Barcelona, 1986.

(47) M. Moreno Friginals, *El ingenio. Complejo económico social cubano del azúcar*, Barcelona, 2001, p.418. キューバの製糖産業の急成長は、世界的な砂糖需要の高まり、革命によるハイチの製糖産業の壊滅、合衆国が英領植民地からの砂糖購入を止めたとなどが関係している。

(48) J. Maluquer de Motes, *Nación e inmigración: los españoles en Cuba (ss. XIX y XX)*, Colombres (Asturias), 1992, p.25.

(49) 一八一二年にはホセ・アントニオ・アポントという解放奴隷による反乱計画が発覚し、その後「白系住民委員会」が結成された。また三〇年代にもサン・ディエゴ・デ・ヌエエスをはじめとする内陸部の町で奴隷による騒擾が発生した。

(50) "Travels in the West"の著者ターンブルは、キューバ在住のイギリス領事で、奴隷廃止論者としても知られていた。

(51) この一連の奴隷暴動事件では、アフリカ系奴隷による革命謀議のうわさが総督オドンネル（任期一八四三―四五年）の耳に入り、彼らに対する過酷な弾圧が行なわれた。この事件後、総督府はそれまで黙認してきた奴隷売買を実質的に禁止し、白系移民の奨励に乗り出すことになる。四三年から翌年にかけてアフリカ系住民に対する無差別の弾圧が行なわれたため、四四年は「革鞭の年」

と呼ばれている。また「はしごの反乱計画」という名がつけられたのは、彼らが鞭で打たれる時はしごに吊るされるが多かったからである。Calixto Masó y Vázquez, *Historia de Cuba*, Miami 1998, p.196.

- (52) クリオーリョ支配層も同じく「アフリカ化」への懸念を抱いていたが、本国人と異なって移民をキューバが本国から自立するために必要な存在と考えていた。「自由な労働」が「強制労働」よりも経済的に勝るといふ考え方は、キューバ社会にも徐々に浸透しつつあり、白系移民は「勤労」「意志」「誠実」「節約」といったヨーロッパ的価値観を体現する自由な労働者であり、キューバ社会に根強い「手仕事を軽視する風潮」を是正してくれるはずであった。

- (53) D. Turnbull, *Travels in the West. Cuba with Notices of Port Rico and the Slave Trade*, London, 1840, pp.144-145.
- (54) M. D. ペレス・ムリーリョがインディアス文書館にある渡航記録を調べた結果である。Yañez Gallardo, *op. cit.*, p. 53, cuadro 3 2b.
- (55) M. Moreno Fragnals, "Inmigració, lleves i guerres colonials. El cas cubà: 1834-1878", *Terceres Jornades d'Estudis Catalano-Americans*, p.24.
- (56) *Ibid.*, p. 27.
- (57) 一八五九年の人口調査で、カタルーニャ人は半島出身者全体の一九・六% (六、一二六人) を占め、ガリシア (一九・一%) やアストゥーリアス (一九・一%) と並んでいる。Maluquer de Motes, *Ibid.*, p.65, Tabla 16. その後

二〇世紀初頭になると彼らの比重はさらに低下し、前世紀中ごろの半分以下 (六%) に縮小する。César Yañez Gallardo, "La emigración catalana a América. Una visión de largo plazo", A. Eiras Roel (ed.), *La emigración española a Ultramar, 1492-1914*, Madrid, 1991, p.181.

- (58) Moreno i Fragnals, *op. cit.*, p.28.
- (59) スペインの輸出先におけるキューバ、プエルトリコ、フィリピンのシェアは、一七九二年の四・四%から一八二七年には一六・六%にまで伸びている。逆に大陸の旧植民地は三九・二%から〇・一%に激減している。キューバへの輸出がピークに達したのは一八五〇年代である。Juan Pan-Montojo (coord.), *Más se perdió en Cuba. España, 1898 y la crisis de fin de siglo*, Madrid, 1998, p.35, cuadro 2.
- (60) Juan Güell, *Rebelión Cubana*, Barcelona, 1871, pp.36.
- (61) カタルーニャでは伝統的にブドウ栽培が盛んであったが、そこから製造されるワインやブランデーの輸出の伸びがいわゆる「原資の蓄積」を可能にし、それが繊維産業などに投下されることで工業化への「テイクオフ」がもたらされた。ジュゼップ・フンターナは「ブドウ株なくては織機もありえなかっただろうし、ブドウ畑はカタルーニャ経済が外部との交易を行なう際の主要な商品を生み出した。そのおかげで工業に必要な原綿を購入できたのだ」と農業の役割を評価している。J. Fontana, *op. cit.*, vol. 5, p.61.
- (62) Turnbull, *op. cit.*, p.123-124. 既に一八一八年から中立国の船に対して差別的関税率が課せられていた。

(63) 米西戦争直前、合衆国はキューバ産砂糖の九割近くを買い付けるまでになっていた。その一方、輸出を伸ばすことはできず、大幅な赤字超過に悩まされていた。島の輸出入における船籍のシェアについても、スペインが四三・五%（一八三二―三七年の平均）であったのに対し、合衆国は二六%に過ぎなかった。Santamaria Garcia, *op. cit.*, p.225, cuadro. 33. 一八九〇年代には、商業をめぐる両国間の緊張はさらに高まり、やがて米西戦争で衝突する。

(64) Turnbull, *op. cit.*, p.161-162.

(65) サマーはカタルーニャには戻らず一生を終えたが、キューバ社会で影響力をもち続け、ハバナのマリアナオ地区の開発にも携わり、また、スペイン政府への資金援助という功績により侯爵位を授かっている。

(66) J. M. Fradera, "La participació catalana en el tràfic d'esclaus (1789-1845)", *Recerques*, núm.16, pp.126.

(67) Ramón de San-Pedro, *op. cit.*, p.53.

(68) 一八三〇年代、キューバからの税収は国の歳入のおよそ一〇%（プエルトリコを含めると一四%）を占めていた。これはマドリド政府が米国で結ぶ信用取引の債務支払い、マリア・クリステイーナ王妃の出費、メキシコやサント・ドミンゴでの軍事展開、アフリカのフェルナンド・ポールの植民地経営、そしてアメリカ諸国との外交などの経費に当てられた。その総額は三〇―三四年の四九万六千ペソから、次の四年間（三五―三九年）に二二六万ペソへと一挙に四・五倍に膨張する。そして、これ

ら税収の七割が諸外国との取引に対する関税収入であった。Santamaria Garcia, *op. cit.*, p.62, 218, 219.

(69) J. M. Fradera, *Gobernar colonias*, Barcelona, 1999, p. 117.

(70) F. Chatelein, *La Habana de Tacón*, La Habana, 1989, pp.101-102.

(71) 歴代の総督すべてが本国商人の利益ばかりを優先し、奴隷貿易を黙認していたわけではない。例えばヘロニモ・バルデス・ノリエガ（任期一八四一―四三年）は、それまで「解放」とは名ばかりであった「解放奴隷」を實質上自由にしたため、奴隷商たちの反発を買い、任期が終了する前に島を去ることを余儀なくされた。M.A. Camino del Olmo, V. Cabo Meseguer, *La Policía Española de Ultramar: Cuba y Puerto Rico*, Madrid, 2003, p.20, nota (10). 本国商人にとって重要なのは、首都マドリドでもさまざまな影響力を行使しながら、いかに自分たちの利益に沿った人物を総督として派遣してもらったかであった。

(72) オドンネル、プリム、マルティネス・カンポス、ウエイラーといった一九世紀から二〇世紀にかけてスペイン史に名を残すことになる重要な将軍たちも、権力への階段の一つとしてキューバ総督を経験している。

(73) 総督は管轄下にある採石場から石を運ばせ、劇場の建設を支援した。また、一八三八年二月の劇場の柿落としては、六回のカーニバルの仮面舞踏会を開催した。最後の舞踏会には七千人以上が集ったとされる。Chatelein, *op. cit.*, p.196.

- (74) M・デ・ピニリーヨスは、植民地行政に尽くしたとして、本国からカルロス三世勲章、イサベル・ラ・カトリカ勲章を授与された。彼のタコン総督との個人的確執は、噴水やパセオ、水道施設、鉄道などの建設ラッシュを引き起こし、この時期ハバナの街は急速な変貌をとげた。両者とも本国政府に自己の立場の正当性を主張し続けたが、その結果、まずタコンが総督の地位を更迭され、その後デ・ピニリーヨスもインテンデンシアのポストからしばらくはずされた。タコンはその後バヤモ子爵の称号を得ている。
- (75) キューバ経済が常に資金不足に悩んでいた理由として、ヌエバ・エスパニーヤ副王領からの援助金 (Sitado) の消滅、奴隷輸入に伴う資金の流出、密輸、本国政府による剰余資金の吸い上げ、移民による資金持ち出しなどがあげられる。Santamaria Garcia, *op. cit.*, p.64.
- (76) タコン総督の書簡には、合衆国がキューバの獲得を常に狙っているというほとんど強迫観念じみた所見がうかがえる。一八三六年春、彼は「もしわれわれが合衆国からテキサスを併合したと仮定しましょう。一年もたたないうちに、キューバ島をめぐる戦争に巻き込まれるでしょう。(…) 本国で王位継承をめぐる内戦〔カルリスタ戦争〕を戦いながら、その結果がどうであれ、キューバの領有を維持できると—たえそれが名目だけのものであったとしても—お思いですか。アメリカ大陸の全ての植民地を失ったいま、この島は本国防衛に必要な軍事力をさらに上回る、効果的な支援が必要なのです」と本国に
- 書き送った。Chateloin, *op. cit.*, p.63.
- (77) La Condesa de Merin (María de la Merced Santa Cruz), *Viaje a La Habana*, Madrid, 1844, p.30.
- (78) Martin Rodrigo y Alharilla, *Cases d'Indians*, Manresa, 2004, p.25.
- (79) Ramón de San-Pedro, *op. cit.*, p.48.
- (80) J. Maluquer de Motes, "La burguesia catalana i l'esclavitud colonial: modes de producció i pràctica política" *Recerques*, núm.3, 1974, p.111.
- (81) Roland T. Ely, *Cuando reinaba su majestad el Azúcar*, La Habana, 2001, p.316.
- (82) Joaquin Roy, *Catalunya a Cuba*, Barcelona, 1988, p.96.
- (83) 主人と従業員は一つ屋根の下に暮らし、食事も同じテーブルで摂ったので、従業員は身元がはっきりし、勤勉な人物でなければならず、同じ親族を形成する場合も多かった。
- (84) Rodrigo y Alharilla, *op. cit.*, p.217.
- (85) Ely, *op. cit.*, pp.315-316.
- (86) *Ibid.*
- (87) *Ibid.*
- (88) Wurdemann, *op. cit.*, pp.42-43.
- (89) Ely, *op. cit.*, p.315.
- (90) *Ibid.*, p.317.
- (91) *Ibid.*, p.318.
- (92) タバコは特に島東部で生産され、サンティアゴのカタ

ルーニャ人たちによって取引されていた。ジャウマ・パルタガスはブレタ・アバホに栽培地を所有し、一八四四年に製造工場を稼働させた。Maluquer de Motes, *Recerques*, p.106.

- (93) ロン・バカルデイの創設者ファクンドは一八〇九年にタラゴーナ出身の移民ジュアンの次男として生まれた。サンティアゴ・デ・クーバで結婚し、一八五二年にバカルデイ社を設立した。

- (94) *Ely, op. cit.*, p.317.

- (95) Maluquer de Motes, *Nación e inmigración*, p.80, tabla 22. この町の軍政長官は「カタルーニャの商店主は営業許可証とパスポートを提示すること。なぜなら若いカタルーニャ生まれのよそ者が多数いるからである。彼らがいっただいどこから入り込んだのか不明である」という内容の布告を出している。Carlos Martí, *Los catalanes en América*, La Habana, 1902, pp.81-82.

- (96) *Ibid.*, p.152.

- (97) 島の外に持ち出される資金は必ずしもスペイン向けに限定されていたわけではなく、合衆国やイギリス、フランスなどにも分散していた。流出資金の使い道は、一九世紀半ばまでは主に砂糖や奴隷取引など商業分野に投下されたが、キューバ独立反乱以降は、資産保護のための「引き上げ」「撤収」という性格が強くなり、持ち出し額も増大した。この問題については以下の文献を参照。A. Bahamonde, J. Cayuela, *Hacer las Américas: las élites coloniales españoles en el siglo XIX*, Madrid, 1992.

スペインにおける伝統的社会の変容と人の移動

- (98) Fontana, *Historia de Catalunya*, vol. 5, p.233.

- (99) Maluquer de Motes, *Recerques*, p.112.

- (100) Jou i Andreu, *Terceres jornades*, p.110.

- (101) 彼については次の文献を参照。Jaime Castelví Toda, *Biografía de D. Miguel Biada Bunyol*, Mataró, 1947.

- (102) 彼の一生は一八九〇年に「鉄道ブーム」を描いたナルシス・オジェールの小説『黄金熱 La Febre d'Or』のモデルになったと言われている。作者自身、グマールの鉄道株を購入していた。その後、鉄道株の暴落や銀行の倒産などによってブームは終わり、グマールの晩年はほとんど破産同然であったらしい。彼については以下の文献を参照。Agustí Ma. Vilà i Galí, *Pilots, carrilaires i tapers. Els Pujol de Lloret i els Gumà de Vilanova*, Sant Sadorní d'Anoia, 1993.

- (103) キューバにおけるスペイン人の権益を擁護し、独立にあくまで反対するため「スペイン海外領土会 Circulo Hispano Ultramarino」が設立されたが、そのバルセローナ支部初代会長にジュアン・グエイ、副会長にアントニオ・ロペスが就任した。

- (104) Juan José Lahuerta, "Gaudí y su época", 『ガウディとその時代』(上智大イスパニア研究センター), 2003, p.8.

- (105) Ramón San-Pedro, *op. cit.*, p.47

- (106) *Ibid.*, p.54, 61, 62.

- (107) Gary Wray McDonogh, *Good Families of Barcelona, A Social History of Power in the Industrial Era*, Princeton, 1986, p.100.

(108) アウゼビはグエイ家に長年奉公していたあるアフリカ系奴隷について、「私たちが家族同様に好きだった一人に黒人女性がいる。彼女はキューバで二二歳のときロス・デ・ベガ將軍に買い取られ、一七歳の時に私の祖母に譲り渡された」と語っている。Rodrigo y Alharilla, *op. cit.*, pp.212-213.

(109) Ramón de San-Pedro, *op. cit.*, pp.95-96. ペドロ・ブランコというマラガ出身の奴隷商が実際に市内に住んでいたことが分かっている。彼は五〇年代半ばすでに亡くなっていたが、その一生はキューバの伝記作家によっても取り上げられ、『奴隷商』というタイトルで一九三三年に出版された。Rodrigo y Alharilla, *op. cit.*, p.210.

(110) Jou i Andreu, *Terceres jornades*, p.111.

(111) Rodrigo y Alharilla, *op. cit.*, p.123.

(112) Martí, *op. cit.*, pp.129-131.

(113) この移民組織は一八四一年に総督から設立許可が下り、「慈愛とカタルーニヤのために」をスローガンに港の近くランパリーリヤ通り二番地に設置された。当初中心となったのはビラノバ出身の移民たちで、カタルーニヤ生まれの成人男子のみが会員として認められた。これは組織のクリオリヨ化 (*criollización*) を防ぐための措置であったと考えられる。しかし、二〇世紀に入ると女性やキューバ生まれの子孫も会員になることが許可された。一九世紀末まで会員数は増大し、ハバナだけでおよそ五千人の会員がいた。移民第一世代が高齢化し、死を迎えようとしていた一八八〇年代には、墓地の一角にパンテオ

ンが建立された。礼拝堂建設の話も持ち上がり、バルセローナのアウゼビ・グエイやアントニオ・ロペス、マヌエル・ジローナら代表的なブルジョアジーからも寄付金が送られている。一八八八年に礎石が据えられたが、落成したのは一九二一年であった。内部にはカタルーニヤのモンセラ修道院の黒聖母 (ムレネタ) のレプリカが安置された。この像はカタルーニヤの守護聖母であり、出自や政治的立場が異なる移民たちを一つに纏め上げるためのシンボルであった。

(114) Yañez Gallardo, *op. cit.*, p.64, cuadro 3.8.

(115) *Ibid.*, pp.30-33.

(116) *Ibid.*, p.128, 155.

(117) 造船危機は一八五〇年代から深刻化し、六〇年代には国内造船への保護措置が撤廃されたことでカタルーニヤは決定的な打撃を被った。バルセローナの北方にあるプナス市の議事録 (一八五八年) には、ある船大工の移住について「この町でも、この国〔カタルーニヤ〕でも彼の職業では普通仕事はないから」と記されている。*Ibid.*, p.65.